

東部カナダの紅葉探訪の旅

(ケベック州及びオンタリオ州)



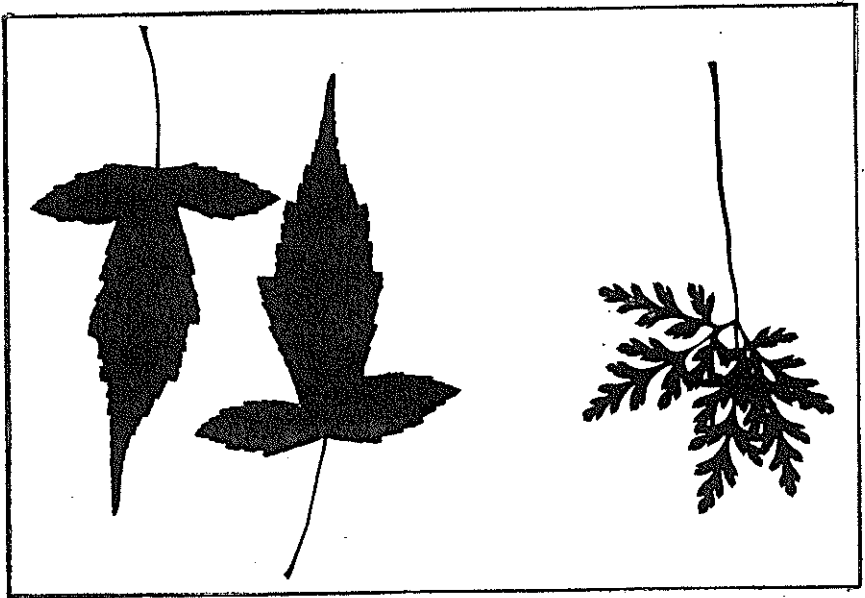
平成6年10月4日～10月11日 8日間

(1994年)

寺 前 信 次

「東部カナダの紅葉探訪の旅」 目次

まえがき	・・・	1	我利我利亡者の添乗員	・・・	26
カナダの簡単な概要	・・・	3	モントリオールの市内観光	・・・	27
10月4日	・・・	7	ローレンシャン高原～オタワ	・・・	30
成田～シカゴ～トロント	・・・	7	オタワの概要	・・・	33
トロント及びオンタリオ州 の概要	・・・	8	10月8日	・・・	35
トロント市内観光	・・・	10	早朝のオタワ散策	・・・	35
メープル街道	・・・	12	オタワ市内観光	・・・	36
10月5日	・・・	12	森と湖の		
トロント～ケベック	・・・	12	リゾート・ハンツビルへ	・・・	38
ケベックの概要	・・・	13	ディアハースト・リゾート	・・・	41
ケベック市郊外の観光	・・・	14	10月9日	・・・	42
ケベック市内観光	・・・	19	ディアハースト・リゾート の休日	・・・	42
10月6日	・・・	22	ハンツビル～トロント	・・・	44
ケベック市内観光	・・・	22	10月10～11日	・・・	45
ケベック～モントリオール	・・・	24	トロント～成田	・・・	45
			あとがき	・・・	46
10月7日	・・・	26			



まえがき

気象観測史上、数々の記録を破った本夏の猛暑は長月になっても衰えを見せず、吹く風の涼気を運ぶ秋が恋しくなるのは自然である。そして待ち遠しいのは人の心を慰めてくれる色付き始めた錦繡の紅葉であった。

本年8月下旬、我が加賀市と姉妹都市を結ぶカナダのダンダス市（トロント郊外）と、交流を深めるために訪れた孫娘たちは、真っ赤に染まったメープル（楓）の葉を持ち帰ってきた。それを見た私は楓の葉一枚を額に入れて飾りたいほど刺激された。

紅葉の美を賞でる心は、東洋人の優雅で風流な中でも日本人が最も優れている。時代の変遷とともに人間の美意識は微妙に変化しているが、我が国の紅葉観賞は三千世界の風情を楽しむ伝統文化である。

燃え立つような錦をまとった日本列島の秋を前に、カナダでは一足早く大きなカエデが色付き始め、旅行各社は日本とひと味違ったダイナミックな紅葉を誘い文句に、カナダの「紅葉のメープル街道」を宣伝していた。

旅好きで好奇心の旺盛な私は、旅によってその国の歴史を知り、彼の地で実物を目にしたときの感動は私の宝であった。自分の目と心で旅を楽しむことは二重三重の喜びで、その感性に取り付かれた病は老いを忘れさせてきた。

すでに今年の外遊は3回に及んでいるものの、融通無碍（ムゲ）の私には長すぎる休憩は返って苦痛であった。「思うこと一つ叶えばまた一つ」と欲望は限りなく、周りの忠告も「犬に論語」であった。

「食わず貧楽」という諺のように名声や財産を求めず、裕福でもない生涯であっても気楽に自分孝行を楽しもうとする私の心の中に、只一つのことを執着して遣り遂げようとする「虚仮（コケ）の一心」が燃え上がってきた。

旅心が病膏盲に入ったとはいえ、「年を知り」「我を知り」「生を知る」私は、病と命は別物だと考えている。「病を知れば癒ゆるに近し」といった古の都人の気分に憧れ、「寿夭は天にあり」とメープル街道にはしゃぐ心は乗ってしまった。

カナダの自然が織り成す華やかな深紅の秋は人気絶頂で、9月下旬から10月上旬の見頃の時期のツアーは既に満杯であった。幸福は自然に任せ果報は寝て待てと焦らずに待つことにした。

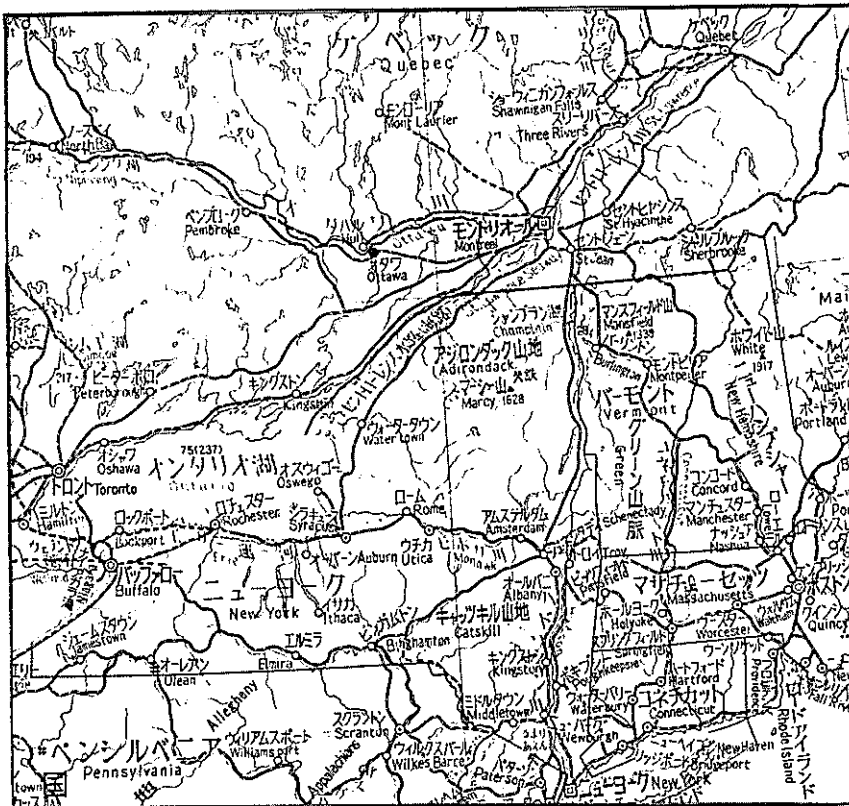
世の中には「零（コボ）れ幸い」の諺があるように、思ってもみなかった10月4日の最盛期のツアーに、欠員ができたという通知を受けた。本当に遊ぶ（？）門には福来ると歓喜に雀躍するばかりであった。

出発まで10日間という慌ただしい準備期間中に、漸く東欧7ヶ国の紀行文の原稿を纏め終えた。10月2日には今次大戦の最大の激戦地であったビルマ戦の戦没者慰霊祭に出席し、長崎からトンボ返りで帰宅して夜行寝台列車に飛び乗った。

世界最大といわれる千変万化する色模様のメープル街道に、引かれ者のように引き込まれたことは、「朝風呂丹前長火鉢」といった遊び人の阿呆に付ける薬はない、との誹りは免れなかった。

戦後は「穴を掘って入る」という平々凡々に過ごしてきた人生だったが、余り他人に迷惑を掛けた覚えはない。「香り松茸、味湿地」のように人にはそれぞれ長所があり、魅力があるのだと、生命の洗濯の積りで物見遊山に旅立った次第である。

カナダの地図と今次旅行の経路



カナダの簡単な概要

「自然」

カナダの面積は大国のアメリカよりも10万km²も広い約1000万km²。これは世界最大の国、旧ソ連邦に次ぐ世界第2位で、日本の総面積(37万km²)の2.7倍に当る。

広大な国土は大西洋、太平洋、北極海に面し、五大湖に面した最南端が北緯42°(函館北方)、中部平原のアメリカ合衆国との国境線は北緯49°(樺太中部)、北は北緯80°を越えて北極圏に入り込む国である。

従って冬は長く厳しい寒さが続いて気候には恵まれていない。6ヶ月の冬と3ヶ月の夏、その間に1ヶ月半ほどの慌ただしい春と秋があるという感じである。

人間の住み方にも特徴が現われている。厳しい寒さをできるだけ避けるため、カナダの人たちは国土の南の部分、即ちアメリカ合衆国との国境線(約6000km)に、へばりついて住んでいる。

この長大な国境線に沿って、約200km程度の幅の長さ6000kmをこえる延々と伸びる帯状の地域に、2800万の人口の約90%が住み、残りは幾つかの都市を除いて人影の疎らな平原、森林、山脈となっている。

「歴史の新しさが特徴」

日本と対照的にカナダは国家として非常に新しい国家であり、構成員も人種や父母の地、言語などの点で種々雑多である。アメリカ合衆国は民族の「坩堝」(ルツボ)、カナダは民族の「モザイク」と言われているが、カナダの場合は民族が地域的に偏在しているからであろう。

歴史の細部については訪問地の項で触れるが、西ヨーロッパ人によるカナダの開拓は、16世紀半ばにフランス人によつて始められた。

広大な未開の土地に散在した原住民と、そこに入植したヨーロッパ人が形成した国家という点では、カナダはアメリカ合衆国やオーストラリアと共通性をもっている。しかし、それぞれの国がこのように違った歴史を展開し、異なった体制をもつ国家になるに当っては、幾つもの要因が重なり合つて決定的な影響を与えている。

カナダの場合、フランス革命前の封建色の濃いフランスの植民地として出発したことに、求められるようだ。

16世紀のフランス人探検家は、セントローレンス川を遡行して沿岸をフランス王の領土と宣言した。同じ頃、のちにカナダの一部を形成することになったニューイングランド(セントローレンス川の南側)はイギリス領と宣言され、イギリスの海外植民地の最初となった。(前頁地図参照)

フランスの北アメリカ植民地に入植が始まったのは1603年で、1608年にケベックに要塞を設けて150年に及ぶフランスの北アメリカ統治の拠点となった。フランス人がここで利益を見出したのは鱈(タラ)と良質の毛皮(ビーバー)である。

このニューフランスの版図が広がるにつれ、南のイギリス植民地との接触・衝突の機会が多くなった。欧州の本国同士の争いは直ちに植民地における争いに発展し、英仏植民地戦争の最大にして最後のものが、1754年に始まった戦争である。

ヨーロッパに於る7年戦争と呼応した北アメリカ大陸の戦闘でも、フランスは1759年の「アブラハムの戦い」(ケベック市)で敗北を喫し、領土をイギリスに譲渡することになった。

1759年のケベック陥落によるフランス領北アメリカの壊滅とイギリス領へ編入を経て、カナダは自治能力をもつ政治的単位と認められた。イギリスの植民地から大英帝国の一員たる自治領に昇格したのは、1867年の「英領北アメリカ法」が制定されてからのことである。

それから数えて127年余りのカナダは、わが国の明治維新のころに創建された国家で、その歴史は極めて新しい。

歴史の新しさは少ない人口の問題とも密接な関係をもっている。比較的早くから開拓されたフランス系のケベック地方や、東部の沿海地方、オリエンタル湖周辺の住民を除けば、カナダ人はその祖先を2、3代さかのぼると、殆ど旧大陸のヨーロッパかアジア人である。

先進国なみの出生率であるカナダの自然増は知れており、総人口の3分の1以上の人口は、最近30年ほどの間の各地からの移民である。

現在カナダの家庭で話されている言葉は、1位が英語、2位がフランス語なのは当然として、以下イタリア、ドイツ、ウクライナ、アメリカ・インディアン、エスキモー、ギリシア、中国・・・と続き、日本語を含めて29種類の言語が用いられている。

以上のようなことから、カナダは日本を基礎にした国家概念には当てはまらない国である。

「連邦制と地方自治の分権制の原則の国」

カナダは行政組織としては連邦制をとっているが、大幅な地方自治を各州に認めている分権制を原則としている。

軍事や外交などの一国として行動することが必要な分野では、連邦政府の裁量が認められている。しかし教育制度、経済政策、地方税制をはじめ、地方自治に関する事については各州、さらに各地方自治体に大幅な決定権が委ねられている。多民族国家では、そうしなければ社会が円滑に機能しかいようだ。

外交は連邦政府の権限に属すると前記したが、その外交でさえも東京にはカナダ大使館の他に、ケベック州などの諸州が独自の代表部を開設し、それぞれの事情に応じて起債、借款など、大使館とは独立して活動している状態である。

考えられないことだが、近代独立国家のカナダには自前の憲法がない。如何してそのようになったのであろうか。

1867年に自治領に昇格した際、その法的裏付けとなったのは「英領北アメリカ法」だが、この法令は、これに先立つこと90余年前の1774年に制定された「ケベック法」に、その基礎を置いているからである。

「ケベック法」は、1776年というアメリカ独立戦争（1775～83）前夜の時点が示すように、英本国と新大陸のイギリス植民地との対立を背景に制定されている。

1759年のケベック陥落により北米のフランス植民地が崩壊し、英領に編入されてから15年間、イギリスはフランス系カナダを徹底的にイギリス化した。しかしそれが失敗したため、フランス系住民の追放、根絶という強硬手段にまで出たのである。

「ケベック法と成立の背後、及び今日の問題」

ところがこの間、フランス系カナダの南隣に位置する、「ニューイングランド」（米領）のイギリス人入植者は、次第に本国政府の利潤吸い上げ方式の植民地政策に

に不満を抱きはじめ、独立の気運を起こし出したのである。その端的な現われが、「ケベック法」制定の前年の1773年に起こった「ボストン茶会事件」であった。

これは英国政府が、新大陸の植民地から利益を吸い上げる手段として、もう一つの植民地のインドから収奪してきた茶を、運賃その他のコストを理由に法外な高い税をかけ、販売しようとした事件であった。

あまりの高値にアメリカの入植者が不買運動を起こすと、ボストンにあったイギリスの出先機関は倉庫の茶の積荷を凍結しようとした。入植者の不満はついに爆発して倉庫を焼き討ちし、これが導火線となって後にアメリカ13州の独立宣言(1776)につながっていったのである。

当時のカナダは、1759年の敗戦につづく1763年のパリ条約により、全面的にイギリス領となり、フランス系に対する迫害があらゆる形をとって行われていった。しかし人口的にはフランス系入植者の方が圧倒的多数を占めていた。

現在の東部沿海諸州からケベック州にいたる地域を、伝統的に開拓していたのはフランス系であり、イギリス系はもっと南のニューイングランドに集中していた。

そのニューイングランドの自国出身のイギリス系植民地の間に、英本国に対する反乱の動きがあることを知ったイギリス政府は慌てた。

10年余り前に武力で制圧したものの、人口の点では優位に立つフランス系が、イギリス系の動きに同調して企てたら、英領北アメリカは一挙に崩壊してしまうと英本国は心配したのである。

そこで政策の一大転換が行われ、フランス系の言語・法律・信教(カトリック)・習慣を大幅に保障する「ケベック法」が、発布されることになったのである。

この英本国の政策転換は賢明であった。これによって迫害が停止され、不満はかなり解消された。その結果、フランス系植民者は独立運動に参加せず(参加の呼び掛けはニューイングランド側からもあった)、英領北アメリカは壊滅を免れた。

これには3つの理由が考えられる。

- ①はニューイングランド側(独立派)がプロテスタントの中でも厳格な清教徒的傾向をもち、カトリックのフランス系とは相反するものがあったことである。
- ②はフランス本国の植民地政策が、徹底的に本国中心の官僚機構によって運営され、それが入植者にヨーロッパの本国を離れて独自の道を歩むという気を、起こさせなかったということである。
- ③は本国中心の植民地経営が現地の一般植民者の間に、何としてもイギリスの束縛から脱して、フランスの主権のもとに帰りたいという、絶対的な愛国心を養成するには至らなかったことである。

実際、フランス系カナダ人は長い間、自分がフランス本国から簡単に見捨てられた孤児であるという、諦めに似た孤独感に付きまといわれていたようである。

以上のようにカナダはアメリカ13州の独立運動には加わらず、英領北アメリカは全面的崩壊を免れた。その崩壊を回避するために力があつた「ケベック法」自体が、爾後のカナダを大きく方向づける深刻な問題を作り出した。

即ち、アメリカの独立戦争が勝利に向って、英本国からの離脱が決定的になると、ニューイングランドの入植者の中で本国との絆を断ち切るのに忍びない反独立派は、大量に英国領として留まったカナダに移り住んできた。

この移住によって従来のフランス系の人口的優位はくつがえり、ほぼ現在のイギリス系とフランス系の比率の6対3に近い住民構成が出来上がった。

そうなるとう度は、多数派を占めるイギリス系住民の目には、「ケベック法」によって少数派のフランス系の権利が過度に保護されていると映ってくる。

だからイギリス系は機会あるごとにフランス系の権利を制限しようとし、フランス系は「ケベック法」を制定した宗主国のイギリス議会を後楯に、これに対抗した。

ここからフランス系の、カナダ国内のイギリス系に対する深い反感と、イギリス本国に対する信頼感という、一見矛盾するかに見える感情が生じてくるのであった。

英仏両系の指導者たちがカナダを自治領に昇格させ、自主的な政策を立案遂行する権利を獲得しようと望み、少なくともある程度まで、英仏両系の対立を解消しようとした政治的妥協の産物が、1867年に英国議会によって制定された「英領北アメリカ法」に他ならない。

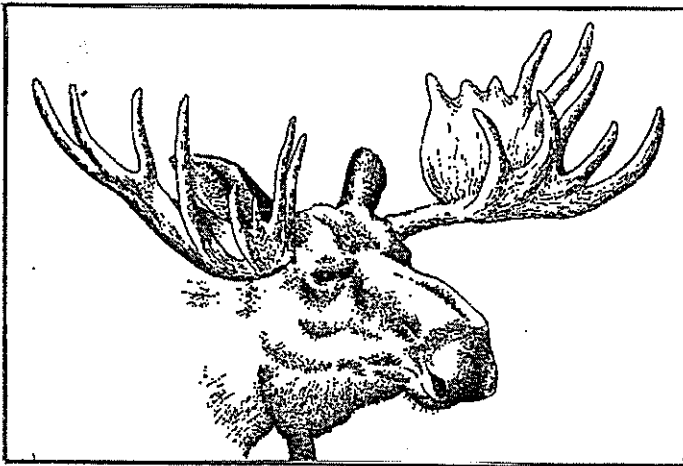
だからあらゆる政治的妥協の例にもれず、この法令もまた英仏両系それぞれの側に不満を残した。

特に少数派として被害意識の強い一般のフランス系住民にしてみれば、同じフランス系の上層指導者階級が、自己の利益のために同胞の権利を犠牲にしたと言えないこともなかった。

1981年12月2日のカナダ連邦議会の表決により、82年春をめどとする英国議会制定の「英領北アメリカ法」から、カナダ自由憲法への移行が可決されたことに対し、ケベック州政府が弔意を表わす半旗を掲げ、反対の意を表明している点でも、歴史は繰り返している。

近年、莫大な石油、天然ガスなどのエネルギー資源が発見され、開発途上の西部3州がケベック州と歩調をそろえて大幅な政策決定の自由を要求し、分裂の危機を認める連邦政府から譲歩を引き出すという一幕もあった。

今後も自由憲法の実現を見るまでには、多くの紆余曲折が予想される。



10月4日

(火) 晴 成田～シカゴ～トロント

昨夜は金沢発20:08の特急寝台列車「北陸」に乗車し、長崎の慰霊祭出席から引き続き疲労が重なって熟睡できた。早朝の6:19に上野に到着、京成スカイライナーにて8時に成田空港第2ビルに到着。

10時に集合すると一行は催行人員ぎりぎりの15名(2組は夫婦)、そのうち男性は4名に過ぎず、いずれも人生の総決算だと生きる意欲に燃えた高齢者であった。残余は現代日本の特色である横行闊歩する若い女性が占め、将に女性上位の光景を見せつけていた。

零れ幸いのように転がり来んできた「紅葉のメープル街道紀行」、それに参加できる喜びだけでも充実した人生であり、無常迅速のこの世に美しい思い出を残したいと歓喜しながら、鳥のように夢を追ってJAL010便に搭乗した。

顧みると前回カナダを旅してから早や18年を経過して、光陰は矢の如く過ぎ去ったが、今次の同気相求める紅葉の艶姿を夢みる旅立ちは、特に人生最高の快哉を覚えるのであった。

成田～シカゴ間の飛行時間は10時間40分で、エコノミー・クラスは満席だと聞いた私は素早く戦術(?)を練り、リックから折畳みの杖を出して機中の人となった。

早速スチュワーデスに膝間接痛の病状を訴え、出来ることなら2座席を依頼したところ、羽撃いた搭乗機が水平飛行に移って間もなく、席を融通して2座席を与えてくれた。深甚の謝意を表したい。

前方の座席に目をやると、ファストクラスもビジネスクラスも閑散として乗客は少なく、JALの経営が赤字つづきの実相を如実に物語っていた。超一流会社の経営努力も、世界経済の不況の波には抗し切れないようであった。

予定表に眼を通すと、トロント到着後は直ちに市内観光の強行軍となっている。孫子の兵法ではないが、「逸(鋭気)を以て臨む」ためにも睡眠は肝要だと、スチュワーデスに感謝しながら無我の境地で横臥した。

気分よく目を覚まして覗いた下界は、数え切れないほどの湖沼が朝日に照らし出され、やがて美しい大海原の大湖面が広がってきた。日本では見ることの出来ない雄大な景観を呆然と眺めていると、赤土の中にグリーンベルトが延々と伸びていた。

一直線の道路が羨ましいほどの広大な土地を走る光景は大陸的であった。その上空を飛ぶ搭乗機は高度を徐々に降下して、初めて見るシカゴ空港への着陸体勢に入り、滑走が終わって機外の人となったのは9:22である。

添乗員の同行しない我々一行はシカゴ在住の日本人女性の出迎えを受け、膨大なシカゴ空港内を誘導された。この空港ターミナルビルは5ヶ所に分かれており、一般道路をはさんでモノレールで結ばれていた。

次々と拡張した感じの空港ビルはガラス張りの天井で明るく、日本の各空港のような華やかな感じは少しもない。工業地帯を控えるシカゴは観光を目的とした空港ではなく、実質的な合理性に造られているようである。

シカゴからトロントへ飛ぶ乗り継ぎ時間は約3時間であったが、休憩所は狭い上にビル内にはレストランはなく、パンを売る不潔そうな店が数軒あるのみである。アメ

リカ第2の大都市にしては余りにも貧弱だと舌を巻くばかりである。

昼食は各人各様に自由行動となった。見掛けが美味そうな食事に銅い慣らさせている私らも、しかたなく不潔そうな落汚れたパン屋に入り、黒人に混じって銀紙に包んだ大きな馬鈴薯を買い求め、混雑する中で空席を探した。

不衛生な感じの黒く染まったテーブルに腰を下ろし、醜いものにも鈍感になりながら味見した馬鈴薯は、北海道のジャガイモにそっくりの味がしていた。

この旅行中の味覚は全く記憶に残っていないが、笑うと皓齒がこぼれる分厚い唇の黒人たちを横にして、舌の上に転がすようにして味わったジャガイモの旨さは、いつまでも忘れられない。

乗り継いだAC724便は13:35にミシガン湖畔のシカゴ空港を浮揚し、エリー湖上を飛翔して、オンタリオ湖畔に広がるトロントへと向かった。

大海のように輝く奇麗な湖水と、晴れ上がった紺碧の大空の間を飛行すること約1時間半、搭乗機は人口2800万のカナダ第1の都市、トロントに定刻の16:05に到着した。

前回カナダを訪れた時のトロントはナイアガラ瀑布見学のための通過に過ぎず、今回は趣を異にした紅葉のメープル街道の観賞が目的であった。その間の18年の歳月は無欲恬淡、もっぱら旅三昧に生きてきた。しかし生き長らえた年月は数字であって中味には何の関係もない。

人生で問題なのは内容である。いたずらに年齢を重ねても長生きにはならず、充実した人生を送った人こそ本当の長生きだと、反省しながら気温6°の寒いトロント空港に降り立った。

トロント及びオンタリオ州の概要

トロントとはインディアンの言葉で「人が集まるところ」を意味し、元来は毛皮の交易の場所であった。その後イギリス人によって町が建設され、一時「ヨークタウン」と呼ばれ街は、現在350万（市内は230万）のカナダ最大の都市に成長した。

この地に初めてやってきたヨーロッパ人は1615年、フランス探検家のサミュエル・ド・シャンプラン探検隊であった。その後、一駐屯地に過ぎなかったこの地に、現在の発展の基礎が築かれたのは1793年からである。

時のカナダ総督のドーチェスター卿は、アッパー・カナダ（カナダ連邦が独立する前、英国の植民地であったオンタリオ州の呼び名）の首都を、ナイアガラからこの地に移転した時のことであった。

上記したオンタリオ州（州都はトロント）の起源は、1791年のアッパー・カナダ植民地の創設に求められる。アメリカ独立革命に抵抗し、アメリカ合衆国を離れた王統派（反独立派）は約10万といわれるが、そのうちの約4万が北上して現在のカナダの地に移住してきた。

中でも内陸を通過してナイアガラに至り、キングストン（2頁地図参照）を中心として地域社会を形成した人々は、1万人に近いと言われている。

彼等はアメリカ革命を支持しなかったが、封建制度の濃厚なフランス系のケベック

植民地の統治下に入ることも好まず、この地に、分離したイギリス系カナダ植民地（アッパー・カナダ）が創設された。

イギリス系カナダ文化の背景に存在したものは、「中庸」の精神であった。アッパー・カナダは従ってアメリカ人の北上が多かったが、更に1812年のアメリカ独立戦争を機会に、本国のイギリスからの移民が激増した。そのためヨークタウンの街は活気づき、1830年代半ばには元の名前のトロントに改称された。

未開発の地に積極果敢に移住し、そこを物質的にも精神的にも文明化していこうとする精神は、イギリス系カナダ人の根本思想であった。

オンタリオに開花したイギリス系カナダ人の背後には、保守的で中庸を好む精神と、新しい真にカナダ的なものを樹立しようとする、進取の気象が見出されるのである。

英本国からの新しい移民はナポレオン戦争後にやってきた人々で、彼らは次第に経済力を強め、アッパー・カナダの富を手中におさめていった。

これに対抗したのがスコットランド系の改新派のウィリアム・リヨン・マッケンジーであった。彼は1835年に民衆の支持を受けてトロントの初代市長に選出された。しかし英国系財閥の圧力があり、市長はアッパー・カナダ全土を巻き込んで反乱を起こした。

反乱に失敗したマッケンジーはアメリカに亡命したが、反乱はトロントにとってもカナダ全土にとっても、重要な結果をもたらした。即ち英国から自治権が与えられ、カナダ植民地の責任政権樹立の切っ掛けとなったのである。

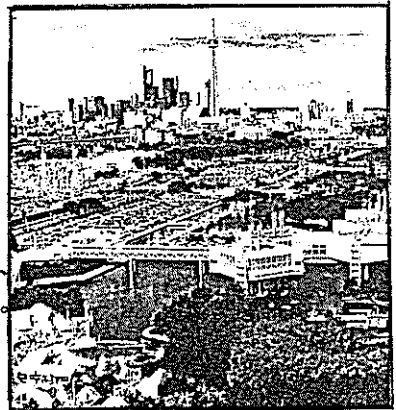
アッパー・カナダから連合カナダ植民地の西部へと変遷を遂げていたこの地は、1867年にオンタリオ州として新設カナダの自治領に加わった。

明治維新とほぼ時を同じくして誕生した新国家は、宗主国であったイギリスとの関係、長い国境線を共有する強大な隣国のアメリカ合衆国との関係の外患に加え、イギリス系及びフランス系の社会的、文化的統合の困難という内患を抱えていた。

このような情勢の中で、トロントは19世紀の終わりにはカナダの商工業の中心として大きく発展し、1830年代に僅か1万だった人口が、1901年には20万人を超える大都市に発展した。

このころまでは、英国系が80%を占めるアングロサクソン系の町であったが、大発展したのは1941年以降である。特に第2次大戦後の政府の積極的な移民政策によって、ヨーロッパはもとより中南米、中国、ウクライナなどの世界中から多くの人に移住してきた。

多くの文化と混血によってトロントは生き生きとした街になった。クールで無機的な大都会の姿と、ホットで情緒的な部分が調和した町並みは、カナダでも国際色の豊かな大都市に変身したのであった。（上の写真はトロント市街の光景）



トロント市内観光 (下図参照)

人が集まると云う意味をもつトロントの観光は、ホテルに立ち寄ることなく、空港からそのまま市内に向い、40分後には建国60周年記念として建立した凱旋門を通過した。

多くの人種が住むモザイクの街は、「諍(イザカ)い同士の軒並び」ではないかと想像していると、青空に映える高層ビルが櫛の歯のように林立していた。

地図を取り出しながら車窓からユニオン駅を眺め、北上を続けるバスは碁盤の目のようになった道路を通過し、グリーンベルトの中に奇麗に咲いた花壇のところで停車した。

ここが、街の中央のオリエンタル州議事堂の前に広がる「クイーンズ・パーク」であった。目に染むような緑の芝生の上を、愛嬌を振りまくりスが尻尾を高く挙げて駆け巡り、ニューヨークのセントラルを思わせる、愛くるしい光景を見せていた。

妹背のようにたわむれるリスにカメラを構えながら追い駆けていくと、カナダの創設者であるアレクサンダー・マクナルドの銅像があり、その奥にオンタリオ州の牙城とも云うべき議会議事堂が厳かに建っていた。

多くの民族の独自性を尊重しながら、多様性の価値を認めてモザイク社会を目指したカナダは、大幅な地方分権主義の国家である。銅板で葺いた屋根が青く輝いている議事堂を、先ず最初の観光場所として選んだガイドの心が理解できるのであった。

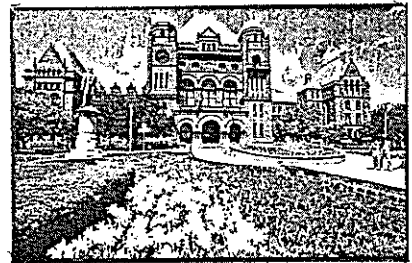
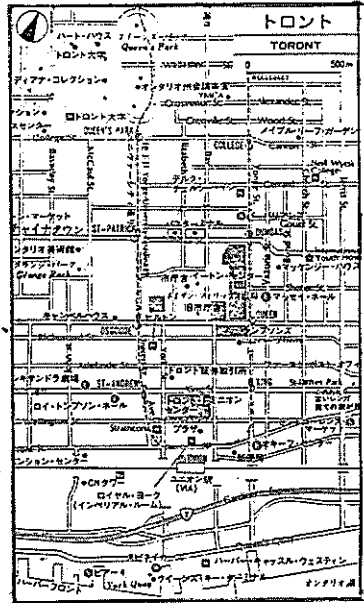
議事堂の向かって右側にはビクトリア女王の銅像が立ち、英連邦構成の一員であることを誇らしげに物語っているようだ。

1993年に100周年を迎えた議事堂は、自由に内部の参観が許されていたが、時間的に余裕のない我々は見学を割愛しなけりなかつた。

一方、議事堂に向かって左側にはトロント大学の大きな校舎が長く伸びていた。この大学の創建は古く、1827年であった。アッパー・カナダの首都であったヨークタウン(トロントの前身)に、キングス・カレッジが誕生したのが始まりで、1851年にトロント大学となり、現在では学生数5万人を誇るカナダ最高の大学と言われている。

議事堂から離れたバスは南北に通じるメンストリートを下り、手渡されたパンフレットにも宣伝されている高層ビル街の広場で停車した。ここがダウンタウンの中心をなす有名な市庁舎前の広場であった。

広場の奥に立っているアーチ型に湾曲した2本の高層建築が市庁舎で、背の低いドーム型の市議会議事堂を取り囲んでいる。これは設計コンペに参加した520の作品

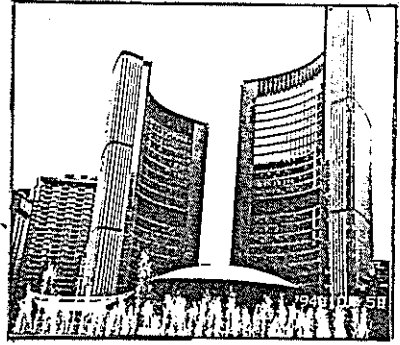


の中から選ばれたユニークなデザインであった。

(右は市庁舎と市議事堂に噴水)

市庁舎前の広場は、庁舎の建築を決定した市長の名に因んで、ネイザン・フィリップ広場と呼ばれ、数十本の噴水が噴き上げていた。冬場にはここがスケートリンクに変身するのもカナダらしい光景である。

バスは素晴らしい斬新な眺めの市庁舎から遠ざかり、1899年に完成した時計塔が聳え立つ旧市庁舎の前を通り、南北に走るヤング通りを南に下ってオンタリオ湖畔へと進んだ。

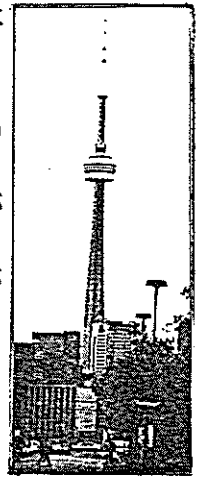


蒼い空に向かって伸びるタワーが見えてくると、バスは公園となっている広場の一角で停車した。しかしタワーに昇ってトロント市内を眺望する時間はなく、写真撮影だけで立ち去らねばならなかった。

市内の何所からでも見える高さ533.33mのタワーは、1976年に完成した世界一を誇るもので、空気の澄んだ日には遙か彼方のナイアガラの瀑布まで見えるという。

大平原に住む人々の高さに対する憧れは、我々の想像以上のものがあるようだ。本年2月、アラビア半島を訪れたが、大砂漠地帯にあるクウェートやバーレーン、カタール、アラブ首長国連邦にもタワーが立っていたが、高さに憧れた現われかも知れない。

CNタワーと呼ばれるこのタワーはCanadian National Railway、つまりカナダ国鉄タワーの略称で、本来は観光用として建てられたものでなく、マイクロウェーブ施設が第1目的であったと云う。(右の写真はCNタワー、位置は前頁参照)



ナイアガラの滝をひかえたトロントには観光スポットはなく、CNタワーが観光NO1となっているようで、州議事堂、市庁舎、CNタワーを見学して、トロントの市内観光は瞬時に終わったような感じであった。

ユニオン駅に近いデルタ・チェルシ・イン・ホテルに旅装を解き、部屋の窓から眺めるトロントの夜景は美しく、私の眼には成り金のブルジョア趣味のように映っていた。ただ残念に思ったことは巨大な地下街を見れなかったことである。

マイナス30°にも冷え込むトロント市民が、極寒から暮らしを守ろうと考え出した大地下街は、配布されたパンフレットの地図にも詳細に記載されていた。しかし我々の今回の旅の目的はメープル街道の紅葉観賞であり、地下街を見れないことに柳眉を逆立てるのは愚かなことで、私の性に合わない。

明日のモーニングコールは早朝の4時と告げられると、胡蝶の夢を見るような幻想的な紅葉を儼に浮かべ、思いがけなく握った幸福に脳天まで高まりを覚えるのであった。

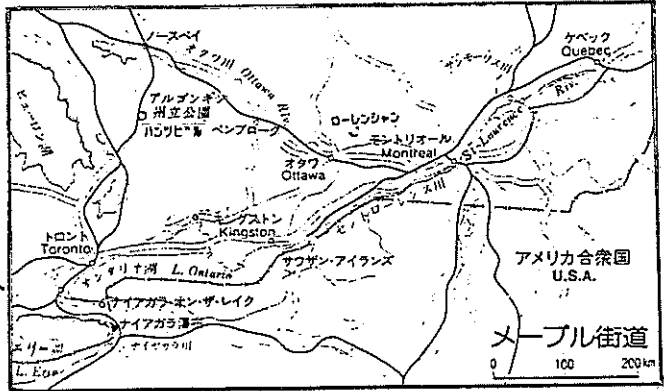
私にとって超生命的な力を持っている旅は若返りの特効薬であり、私の存在の原動力だと考えながら、知らず知らずのうちに冥利に包まれてベット・インした。

次に「メープル街道」について若干記載する。

メープル街道とは (下の地図参照)

メープル街道とは、オンタリオ湖から大西洋に向かって流れる、セントローレンス川に沿った約800kmの地域を言い、世界最大の楓が色付く紅葉の名所である。

ナイアガラの滝、カナダ最大の町トロント、モントリオール、ケベックを含むこの地域は、東部カナダの旅のハイライトと言われている。



国旗にもなっているカナダを象徴するカエデのメープル街道は、カナダの歴史の街道でもある。カナダの開拓は東部からセントローレンス川を遡る形で進められてきた。従ってケベック・シティからナイアガラ（トロント）の道を辿れば、カナダの歴史を探求する旅にもなるのであった。

この街道の地域の町や村には要塞や古い街並みが残り、その姿は背景に広がる大自然とともに、この国の人々が生き抜いてきた時の流れを静かに物語っている。

セントローレンス川に沿った地域には、カナダの主要な都市が集まっている。それは「人種のモザイク」といわれる大都市の「トロント」、首都の「オタワ」、フランス文化の香り漂う「モントリオール」、フランス植民地の拠点として建設された最も古い歴史をもつ「ケベック・シティ」である。

今次紀行では上記の都市以外にも、モントリオール～オタワ間に広がる「ロレンシャン高原」、オタワ～トロント間の北方にある「アルゴキン州立公園」の一角をなす「ハンツビル」の紅葉観賞も含まれている。

多くの民族、フランス文化とイギリス文化、それに大自然と、この街道には「メープル」と「ピープル」のカナダが集約されている。我々は景色が最高に美しく映える紅葉の時に、この地を訪れることは、理想と現実の世界である「涅槃の境地」に行くような思いがしていた。

10月5日 (水) 晴 トロント～ケベック

4時に起床して温度計を見ると3°を指し、カナダの気候は予想通り紅葉の最盛期を迎えていた。トロント空港の出発ロビーに飾られていた「鳥居」は我々の目を引き付けていたが、これは関西新空港との直行便の開設を祝って立てたもので、日本人観光客の多い証拠であった。

7時に飛翔した100人乗りの小型機は、薄明く茜色に染まった黎明の大空を東に向かった。未だ真っ暗い街には点々と灯が煌き、明暗のくっきりとした水平線には

CNタワーが鮮明に威容を現わし、悠大なセントローレンス川は帯を流したように走っていた。

昇る朝日は速く、都会の度真ん中に紅葉を見つけたと思った途端、一面に広がる下界から、妖しいまでに美しい紅と黄の世界が次々と押し寄せ、初めて錦繡の秋を楽しむ旅の実感が湧いてきた。

機窓一杯に映ってくる眺めは我々を紅葉に溶け込ませよう、その開放感に浸る旅心は満点である。秋酎の息吹きを感じながら旭光に輝く感動的な光景を期待していると、エンジンを全開して航行した搭乗機はもうケベック空港を滑走していた。飛行時間は1時間半であった。

ケベック空港には和服姿の日本女性の大きな写真が掲げられ、ここでも関西新空港への直行便の乗り入れを祝賀していた。新空港の開設がこれほどまで関心事となっていることは驚きで、よい印象を抱きながら待望のケベックの土を踏んだのである。

ケベックの概要

ケベック・シティはフランス植民地の拠点として建設され、カナダで最も歴史のある都市である。古くからフランスとイギリスの植民地支配争奪の的となり、戦いが繰り返された因縁の地である。

イギリス支配下の時代を経てきた今も、住民の80%がフランス系カナダ人という完全なフランス文化圏である。殆どの人がフランス語を母語とするだけでなく、その気質や生活習慣までフランス色は根強く浸透している。

それだけに18世紀の歴史をそのまま閉じ込めてしまったような旧市街は、モンリオールよりも更にヨーロッパの香りを留めている地域である。

1535年にフランス人探検家ジャック・カルティエがケベックを訪れ、1608年にサミュエル・ド・シャンプランの入植により、町としての第1歩を踏み出した。

フランス系の入植地として誕生したが、その後は領土を求める英仏の野望と熾烈にぶつかり合う場となった。そして1759年のアブラム（ケベック・シティ郊外）の戦いでフランス軍が敗戦を喫したことは、カナダの概要で記述した通りである。

しかしイギリスの支配下に入った当時のケベックは、90%以上がフランス系であった。弱肉強食の時代だったとは言え、老獺きわまる当時のイギリスは、南アフリカを横取りしたボーア戦争と同じく、帝国主義の悪の権化のような感じがしてならない。ビルマ戦線で英軍と戦った経験をもつ私の偏見であろうか。

「冬働かず 春に恋をし 夏は働き 秋には信心深くなる」、これはケベックの古い民謡の一節である。

「歌は世に連れ世は歌に連れ」と言われているが、カナダの凍て付く冬の厳しさ、信仰の厚いカトリック教徒の姿など、この短い歌の中にフランス系カナダ人の心情が表現されており、私の今次紀行最大の憧れの地はケベックであった。

ケベック市郊外の観光 (下図参照)

セントローレンス河口から約600km上流の、川が急に狭くなった地点がケベック・シティで、北アメリカ大陸のジブラルタルとも呼ばれている。

白人が建設したカナダ最古の町は、北アメリカにおける最古の城壁都市で、この古都の見学を後の楽しみに残し、一行は先ず郊外の名所の観光から始まった。

空港から東に伸びる街道上からケベック市街を右に見て、アクセルをいっぱい踏んだバスは冷たい川風を受けながら快走を続けてた。この国の行き交う自動車は事故防止のため、昼間もヘッドライトを照らして走っていたが、見慣れない我々には異様な感じであった。

ナンバープレートも後部だけというのもカナダの特徴で、人口が希薄な性交交通量は至って少なく、スピードを上げて疾走するバスの右手に、セントローレンスの雄大な流れが見えてきた。この地に入植したフランス人は、百川が海に集まる自然の理を利用して遊航してきたのであろうか。

宏大に広がる行く手には19世紀の石造りの家が点在し、王の道と呼ばれた北米最古の街道から、澄んだ空が川面に映る光景が見えると、陽光が射るように紅葉を染め上げていた。

大気が引き締まった雄大な眺望なら、山野に出て自然の山水を眺めるのに超したことはないと思っていた。眼に映ってきたセントローレンス川に浮かぶ「オルレアン島」は、紅や黄の紅葉を緑の中に絶妙に配分し、絵巻物を広げるように変化しては去って行った。

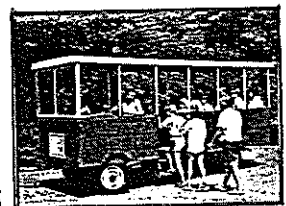
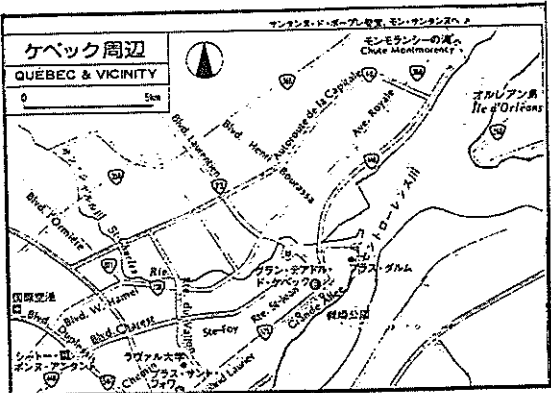
街道の左手に現われてきたモンモランシー滝や、サンタンヌ・ド・ボープレ聖堂を眺めながら、華やかに秋を彩る道路をさらに東に進み、鬱蒼と繁った山の中に通じる坂道を登った。ここがケベック・シティ東北方約80kmの「グランド・キャニオン」で、アメリカと同じ名称の観光地となっていた。

「グランド・サンタンフ滝」(位置は上図の右上枠外)
 森林資源の豊富なケベック郊外は全山が厚い樹林で覆われ、蒼古な大木で遮蔽された森の中に、ぽつんと一軒の山小屋が建っていた。そこが「グランド・キャニオン」入口で、紅葉探訪に相応しい真っ赤に塗った公園バスが待ち受けていた。

(右の写真は真っ赤な公園バスの電気自動車)

馬の背に揺られるようにバスは急な坂道を下り、溪谷に橋が架った崖淵で下車した。溪流が流れる谷間は紅葉狩りに似合う景観を呈し、自然に古の都人(ミヤコビト)のような気分を醸し出させるのであった。

馬の背に揺られるようにバスは急な坂道を下り、溪谷に橋が架った崖淵で下車した。溪流が流れる谷間は紅葉狩りに似合う景観を呈し、自然に古の都人(ミヤコビト)のような気分を醸し出させるのであった。



渡りははじめた橋の上から覗き込むようにして俯瞰する景観は、奇岩怪石が累々と重なる日本の溪谷のようで、岩石の居並ぶ川床に白い渦が巻き上がり、飛沫が高く飛んでいた。

橋を渡り終わると、鼻先をこするほどの至近の紅葉がたてつづけに迫ってきた。紅葉との出会いはとても難しいと言われているが、赤や黄のかたまりが「これでもか、これでもか」とぐんぐんと近づいてきた。このような光景は私の生涯の中では初めての観賞で、贅沢な感性だと心の底から味わっていた。

(右は溪谷の景観、白く映っている木の葉は紅葉)

周囲の燃え立つような錦繡に彩られた中を溪流に沿って下った。そこには幽玄・壮麗な山容に水量あふれる滝が懸り、これが紅葉真っ盛りの「グランド・サンタンヌ滝」の美観であった。

壮大な溪谷に技巧を凝らしたように滝壺に向かって落下する姿は、長く人跡未踏のまま残された地球の皺であろうか、と私の全身は紅色に染って胸の鼓動まで高まりを感じてきた。

(右はグランド・サンタンヌ滝の景観で、この下にも滝が連なっている)

落差が74mもある2段になって落ちる滝は、私に「滅却心頭火自涼」の名言を思い出させる滝となっていた。その威厳をたたえるように彩る溪谷の絶景に、絶句して暫く立ち止まり、脳裏に深く刻んだのである。

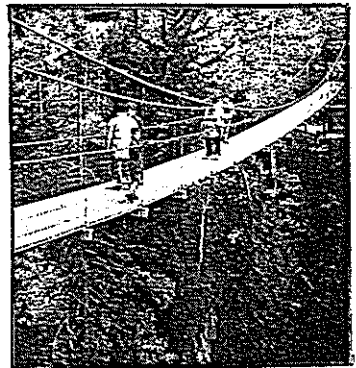
峡谷に沿った細い坂道で一息ついていると、谷を渡ってくる涼風が快く肌をさし、滝の飛沫が霧になって流れた。

そこに張り出した枝の紅葉は水面を赤く染め、波に模様を描くように漂う落葉に、自然の織り成す妙味を感じていた。

峡谷に架った吊橋は大きく左右に揺れ、高所恐怖症の私も度胸を出して渡りはじめると、溪流を囲む木々の葉色が水面に映り、立体的な紅葉の中に身を置くようであった。(右は吊橋と、写真では白く見える紅葉)

「描くもよし、撮るもよし、紅葉かな」の風情が漂う景色に、言い知れぬ感銘を覚えて対岸に辿り着いた。断崖の中腹に立って空を見上げると、そこにも天の画板にカエデが紅を放ち、どこまでも「泉石烟霞の病」(山水の趣味に取り付かれる病気)に取り付かれていた。

休み休み杖を頼りに急斜面の坂道を登った。立ち止まって仰いで見る紅葉も美しいが、道に落ちた紅葉もそれに劣らず、散り重なった上を踏みしめて登る心地は、王侯



の絨毯を踏むような気分である。

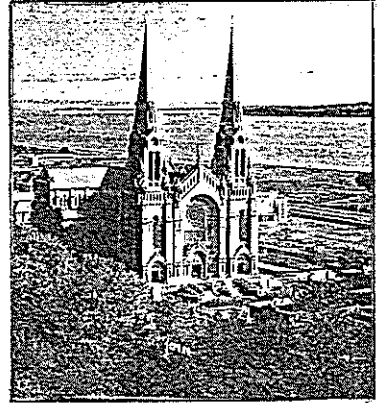
錦繡のトンネルを潜っているような感じで登って行くと、断崖となった岩壁に真っ赤なナナカマドが枝先に実を付け、圧倒的な量と質の美観は我々を陶酔させてくれた。本当にこの溪谷を訪れたことは「値千金」である。

全山に彩りを添えていたグランド・キャニオンに驚嘆し、深紅の見頃に出会ったことに感謝しながら公園バスに乗車し、バスを乗り換えて出発した。

「サンタンヌ・ド・ボープレ聖堂」

グランド・キャニオンから来た道を引き返すこと約50km（ケベック市東方36km）、サンタンヌ・ド・ボープレという小さな町の東端に聳えた聖堂の路傍でバスは停車した。

天を衝くような尖塔が立った教会は、背後に火炎にも似た紅一色の山を背負い、前方には悠久の宇宙を思わせるセントローレンス川が流れ、静寂な環境に包まれていた。（右の写真は聖堂の全景。手前は紅葉の山、向うはセントローレンス川）



カナダでは衰微が憂慮されるフランス語と異なり、宗教は古い歴史のローマ・カトリックが優位を保ち、全人口の46%がカトリックである。これはフランス系に加えてスコットランド系、アイルランド系、イタリア系、ポルトガル系の人々にカトリック信者が多いからである。

キリスト教の新教は17%、英国国教会が12%を占め、宗教もフランス系とイギリス系という二大民族と不可分な関係をもっている。

広大な国土のカナダが、ヨーロッパで異端視されたキリスト教改革諸派の運動の場となったのはアメリカ合衆国と同様で、主としてオンタリオ州南部であった。

北米におけるフランス文明の発祥地のケベックはもちろんカトリックである。どんな田舎町にいてもカトリック教会が目に入り、新フランスと呼ばれたケベックの歴史が思い出される。

サンタンヌ・ド・ボープレ寺院は、モンリオールのサンジョゼフ礼拝堂（明後日訪れる）らとともに、ケベック州の三大巡礼地とされている。この教会は1658年に船が難破しそうになった時、聖母マリアの母アンヌに祈りを捧げて救われた水夫達が、その御礼に建立したのであった。

奇跡が起こったことから聖地となり、奇跡の聖堂として信仰を集めているネオ・ロマネスクの建物は1932年の建造で、建築中から奇跡が起こり始めていたと言う。

長年にわたって病に苦しんでいた人が、聖堂の建材を運ぶ手伝をしようと石に手を掛けた途端、嘘のように治ってしまったなどの数々の逸話が伝えられている。

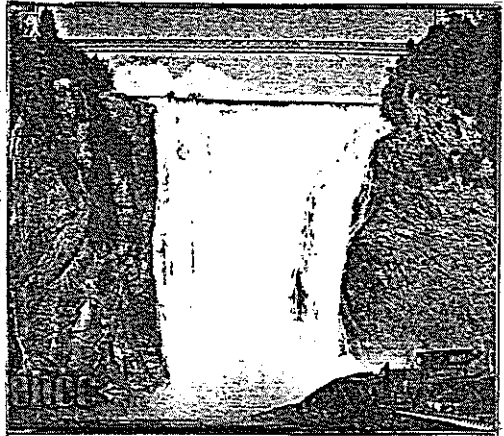
寺院内部の壮麗な列柱で支えられた天井には、聖アンヌの生涯が美しいモザイクで描かれ、床のタイルや200枚のステンドグラスも見事で、入口の傍らには松葉杖や車椅子が渦高く奉納されていた。

奇跡が本当に起きたかは甚だ疑問に思われるが、「信は力なり」という言葉もあり、人知の及ばない現象が現代人の信仰を集めている点に、興味を覚えるのであった。

「モンモランシー滝」 (位置は14頁地図参照)

サンタンヌ・ド・ボープレ聖堂の西方約4km (ケベック市より12km) の街道上にある瀑布がモンモランシー滝で、セントローレンス川に浮ぶオルレアン島に架った橋と相対峙している。

滝壺まで行く時間はなく、望遠レンズで眺めた滝の上流には湖水が広がっていた。ガイドに質ねると、滝はモンモランシー川の水が滝となって落下しているのがあった。大きな滝の上流には必ず川や湖水が控えているようである。



モンモランシー川がセントローレンス川に注ぐ河口となっているこの滝は、落差83mというからナイアガラよりも30mも高い。(上の写真はモンモランシー滝)

落差は大きい幅が狭いため、轟音を響かせて断崖から真っ逆様に落ちる偉観は、ナイアガラに及ばない。しかし大陸の自然のスケールの大きさを感じさせていた。

冬は半ば凍結し、滝の下から氷の塊が落下する光景が見られると聞き、雪解け時期の水の勢いはどれ程だろうかと、想像もつかない想像をしていた。

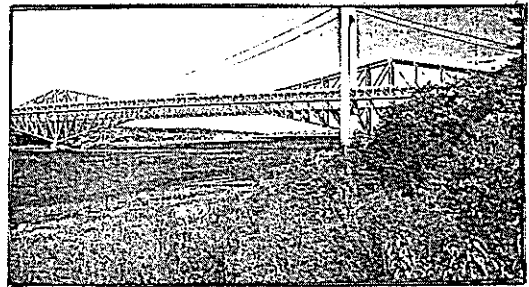
よく注意して眺めると兩岸の緑の中に紅葉樹が真っ赤に染まり、上下には展望台があって観光用のケーブルカーまで設備され、滝壺に通じる道に人影も見えていた。

滝に向かって右側の断崖の上に一軒の建物が望遠されたが、息をのむような雄大な大自然と語り合いながら暮らす住人に、一縷の羨望を抱いてバスに乗車した。

「オルレアン島」 (位置は14頁地図参照)

媚艶を競い合った錦秋の峡谷や、壮観な滝が落下する幽玄の世界に別れを告げ、モンモランシー滝の前からセントローレンス川に架った鉄橋を渡った。

橋の上を通過する車窓から上流を眺めると、カナダの歴史の第一頁を語るケベックの街が、水面上に絵を書いたように映ってきた。(右はオルレアン島に架る鉄橋)



愀然と流れる大河を渡ったオルレアン島は、周囲が67kmもある大きな島で、楓が紅色に染まった全長34kmのハイウェイを快走した。畑や牧草地が広がる長閑な島は人口約7000人、どこかの国のように自然を還せと絶叫しなくとも、羨ましいほど自然は守られていた。

濃い緑に包まれた島には17世紀時代の小さな白塗りの教会や、田舎風の石造りの家が点在し、サイロあり、馬鈴薯畑あり、イチゴ畑がある田園風景は北海道のようで、緯度も稚内と同じであった。

島民の暮らしは農業が中心で、林檎園の続く中に大きなカボチャを並べた市場が開

設されていた。一方では草を食む牛の群れも見えるように酪農も盛んで、島特産のチーズは品質の高さで人気を呼んでいる。

今を盛りに燃え広がった錦繡の楓は観賞するだけでなく、実用的にも価値がある樹であった。楓の幹から採集するメープル・シロップはカナダ人の生活必需品で、先月孫娘がカナダからこのシロップを持ち帰り、私の最高の嗜好品となってしまった。

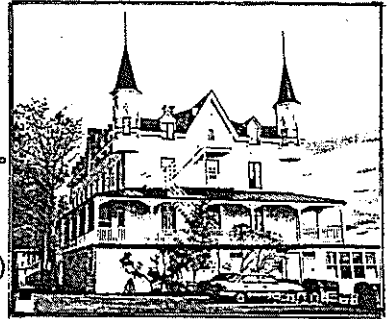
この製造方法は冬期に入ると楓の樹皮に傷をつけ、ゴム液を採るように樹液を採集し、これを煮込んで精製する。これは蜂蜜のように甘い糖分がなく、我々のような老人には最適である。

架橋の技術が発達するまでは、島と本土との交通は渡し船か川の結氷を待つしかなかったが、17世紀に入植して住むようになった人々の故郷は、フランス北部のノルマンディ地方であった。

流れに棹（サオ）ささず、悠々閑々として自適の生活を送ってきた彼等は、ノルマンディの面影を色濃く残し、そのうえ教会には開拓開始から今までの誕生、結婚、死亡の記録が残されていると云う。

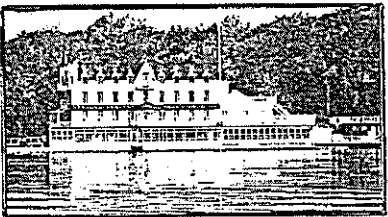
盆栽のような美しい環境に囲まれ、今も昔ながらの暮らしが営まれているオルレアン島は、まるでセントローレンス川に浮かぶタイムカプセルのようで、目を見張りながら街道を疾走して島に一つしかない信号を通過した。

牧歌的な風景の中にカラフルに彩った家を眺めていると、バスは尖塔のある真っ白い建物の敷地に入った。ここがセントローレンス川を真下に臨んだ「ゴエリッシュ・ホテル」で、一行はこのホテルのレストランで昼食を摂ることになった。（右はゴエリッシュホテル）



カナダ観光の筆頭のナイアガラ瀑布を訪れる人のうち、20分の1しか訪れないというケベック、しかも更に郊外に足を伸ばす観光客は極く僅かと思っていたところ、案に相違して客は満員で、我々の隣席は香港の人達で埋め尽くされていた。

昼食を終えた私は150年前に建てられた気品の溢れる内部を見学し、周囲の自然を楽しみながら散策に出掛けた。海のように広いセントローレンス川の上流が急に川幅がちぢまり、そこにケベックの町並みが水の上に浮かんでいた。（上は水面上に浮かぶように見えるゴエリッシュ・ホテルの全景）



このホテルの創建者は、イギリス海峡に臨んだノルマンディ海岸を懐かしく思い、島の西部にあるセントローレンス村の突端を選らんだのであろうか。水上を遊覧するような感じのホテルの眺望は抜群で、早速カメラにおさめて記憶に刻み込んだ。

帰路についたバスの中で、北海道東部に大地震が発生したというニュースが伝わった。カナダは世界一の普及率を誇るケーブルテレビの他、衛星放送やファイバーによる通信技術は世界の最先端をいっており、速いニュースは驚くばかりであった。

それは広大な土地と希薄な人口の国柄を反映して発達した通信技術であった。また広い国土に不可欠な交通技術も目覚ましく、中でも氷結と湖沼の多いカナダでは短距離離着陸機が発達し、必要に迫られた生活の知恵である。

ケベックの街が近づいてきた車窓に映る大昭和製紙の大工場は、自然に我々の身体に流れる血を興奮させた。まるで駿馬にまたがって疾走するような優越感を覚え、カナダへの貢献を鼻高々と眺めていた。

カナダの経済を支える産業は、基本的には資源及び資源関連産業である。全土の44%を占める膨大な森林資源と、豊かな包蔵水力、それに世界のトップレベルの石炭、石油、天然ガスの埋蔵量、これらを考慮した日本のカナダ進出を期待しながら、憧れの市内に入った。

ケベック市内観光 (右下の地図参照)

城外のケベック州議事堂に直ぐ近いラディソン・ホテル (地図の左中央) に、旅装を解いた一行は小休止の後、英仏の争奪の地となったケベック市内の観光に出掛けた。

遙かな戦の夢の跡を追いかけるように徒歩でホテルを後にすると、延々と伸びる城壁に囲まれた丘が目前に迫ってきた。杖をつきながらの痛む膝も、好んですることには苦痛も忘れさせ、工事中の城塞の坂道をしててくと歩いた。

登りつめた新市街の丘はパーラメント・ヒルと呼ばれるなだらかな丘で、区画整理された角地に、高さ50mの塔が立つ石造りの白い建物が見えてきた。

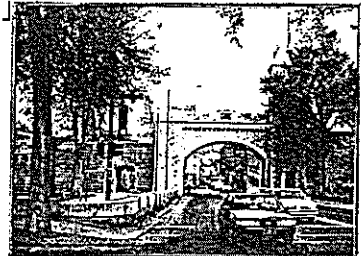
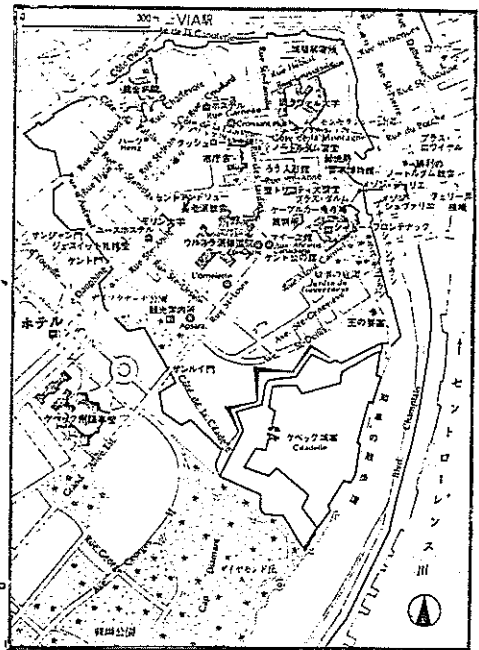
これが1886年に建造されたルネサンス・ゴシック様式の「ケベック州議事堂」(地図左中央)で、壮麗な外観は宮殿のようであった。

フランス系カナダ人が、心の底から熱烈に国家意識を追求してきた殿堂は、命を賭けてきた昔の人の果てしない気概を遺し、その反対側には州首相官邸も見えていた。

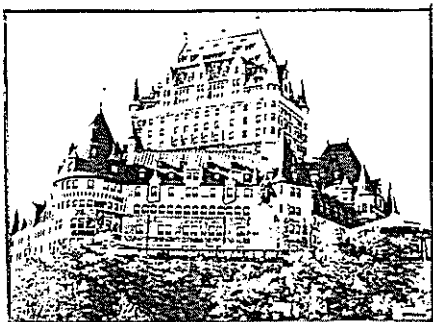
議事堂前にある320年前に創建された「サンルイ門」(現在のものは130年前)をくぐった。そこからはヨーロッパのケベックを思わせる旧市街となり、近代的なホテルやビジネス・エリアの新市街とは一変し、石畳みの街並みであった。(右はサンルイ門)

サンルイ門から真っ直に進んだ所が、一際にぎやかな広場となっていた。これがケベック市内観光の中心地、「ダルム広場」(フランス語ではプラス・ダルムと呼ぶ)であった。

広場の中央にケベックを中心とした新フランスの創設者「サミュエル・ド・シャンプラン」の像が立ち、広場を囲むように市庁舎や郵便局などの、中世を思わせる建物が軒を連ね、群れをなした観光客で溢れていた。



旅立つ前に通読してきた記憶の中に刻み込んできた、「シャトー・フロンテナック」の青銅の急斜面の屋根を思い出していると、日光によって刻々と表情を変える煉瓦色の巨大な建物が、広場の南側に古城のように天高く聳えていた。これがケベック随一の高級ホテルで、街のシンボルであった。(右はシャトー・フロンテナックの威容)



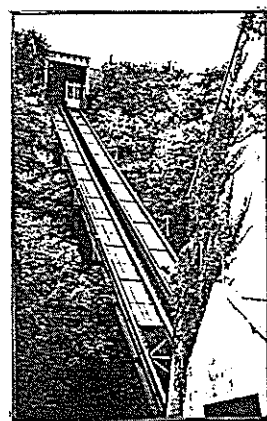
どこからでも見えるこの建物は1675年に創建され、現在の建物は1893年に再建したものであり、名前はフランス領だった時代の傑出した総督の名に因んで付けたと言う。

広場北側の「トリニティ大聖堂」(前頁地図中央やや右上)は、1804年に建立された英国国外では最初の英国国教派教会で、更に北側の「ノートルダム聖堂」はケベックにおけるカトリック信仰の中心的な存在であった。

ガイドから一応の広場周辺や市街の名所の説明を聞き、郵便局の隣のレストラン(カフト・ロップ)に午後6時に集合を告げられ、約2時間の自由行動となって一行は散り散りばらばらになつて消えて行った。

カナダ発祥の地とも言える「ロウワータウン」(セントローレンス川に沿ったロータウン)を目指した私らは、ダルム広場の東側の乗り場から「ケーブルカー」(フニキュラーと呼ぶ)に乗車し(1ドル)、45°の急斜面を下った。

1分間もかからない乗車時間で降りた下の駅は古い民家の建物で、ミシシッピ川を発見した人が1683年に建てた家を、改造したものであった。(右はケーブルカーと上の駅)



由緒ある下の駅の前通りが「プチ・シャンプラン」通りと称し、ケベックが1608年に発見されて以来、崖下の港町として栄えてきた。(前頁地図右側の川淵)

北米で最も古い繁華街も、陸運が発達して水運が衰えるにつれて寂れるままになっていた。しかしロウワータウンの価値に気付いた人々によって再建され、今は石畳の狭い道の両側に御土産店やレストラン、カフェ、ギャラリーが、櫛の歯のように並んで庶民の街となっている。

ショッピングを楽しむ人々に混じって私らも一軒一軒、片っ端から覗いて歩いた。娘に依頼されたアンモライトを探したが見当らず、インディアンの店で鹿皮の袋を記念として購入した。(右はプチ・シャンプラン通り)

プチ・シャンプラン通りを通り抜けてセントローレンス河畔を歩き、再びフニキュラーのケーブルカーに乗ってダルム広場に帰った。

夕暮れ時を迎えた広場は周辺から押し寄せた人の波で混雑し、石畳の上を馬車にゆられていく姿もあり、中々の風情のある光景であった。



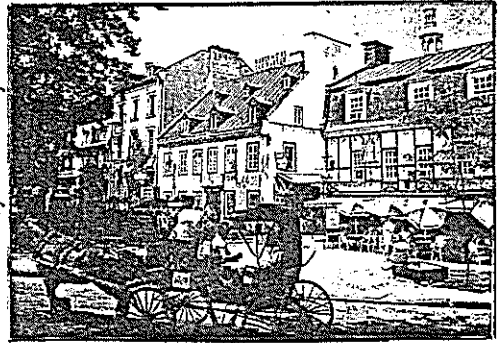
好んですることには苦痛を感じないと前記したが、漫ろ歩きは疲れるもので、自然

に私の足は広場の北側にある、赤い屋根に赤白のテントを張ったカフェに向かっていた。

17世か18世紀の古風な外観の店の中は、私と同じように脚が棒になった人たちが満員の盛況であった。

漸く薄汚い空席になったテーブルを見付け、安堵しながら紅毛碧眼の人々に混じって飲んだコーヒの味は格別であった。

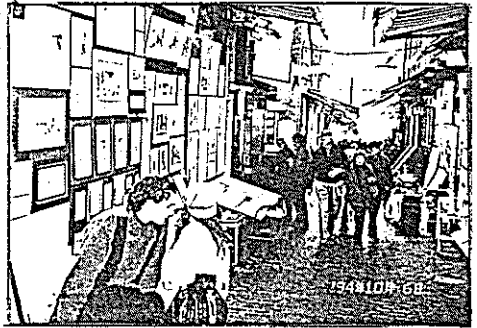
(右の写真の右側は休憩したコーヒ店)



プラス・ダルム広場のある旧市街は、細い小路が迷路ようになって走り、店はそのためにあるような雰囲気が高い、カフェを出た私は直ぐ隣の角を曲がって小路に入った。

この通りは「トレゾール通り」という僅か数十mの細く短い通りだが、道の両側に自作の画を一面に飾って売っていた。肖像画をかく画家たちも入口に陣取り、まるでパリのモンマルトの丘のような光景である。

(右はトレゾールの画家の通りの風景)



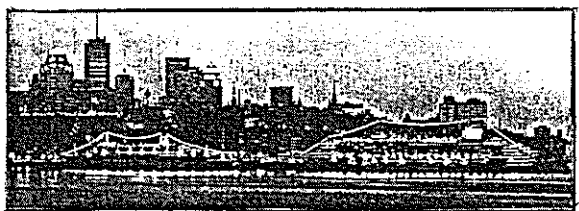
画家の通りを通り抜けると下り坂となり、突き当たりが城壁に囲まれた広場となっていた。

ここが町の概要をつかむ「城壁展望所」で、セントローレンス川に沿って延々と伸びる城壁が見え、古い歴史の町をそのまま閉じ込めている旧市街の様相が、一目瞭然と窺える絶好の場所であった。

城壁展望所には古戦場を思わず数十門の大砲が据付られていたが、「私は忘れない」というケベック人の合言葉の潜在的な力を表現しており、フランス系住民の心の中が読み取れるのであった。早速、記念撮影を撮って薄暮の空を仰ぎながら、夕食のレストランに急いだ。

中世を彷彿させる薄暗いレストランでの夕食を終え、再び城内の石畳の細い道の街並みを通してホテルに帰還し、開拓の国カナダでも一際異彩を放つケベックの夜を迎えたのである。

ケベックの町は私に哀愁に似た深い印象を残した。ホテルの部屋に入って安らいだ気持になると、不思議なことに私もこんな所に住んでみたいと思う心が湧いてきた。



そして「熟所忘れ難し」という言葉が私の脳裏の中を走った。住みなれた所に愛着があり、いつまでも忘れられないというフランス系住民の心が解るのであった。

部屋から眺める窺突とした夜景は願望成就の性か、礼を尽くし辞を尽くして私を手招いているように映り、不思議な快感に浸って枕席の人となった。

(上は美しいケベックの夜景)

10月6日 (木) 晴 ケベック市内観光

希望を満たすかのように陽光が部屋の隅までも照らす快晴の朝を迎え、清浄な冷気を吸い込みながらバスに乗車し、水天一碧に見える市南部の高台へと走った。

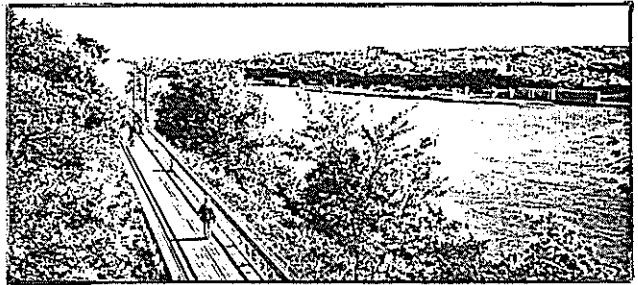
濃い緑の絨毯を敷きつめたような芝生の中に、旭に照らされて真っ赤に染まった紅葉が見える公園に着いた。ここが「戦場公園」で市民の憩いの場となっている。

嘗て血で血を洗う激しい戦いがあった処だが、とても信じられないほど今は静穏で平和な空気に包まれ、自然と見事な調和を見せるケベックの観光名所の一つとなっていた。(位置は19頁地図の左下)

緩やかに起伏した丘陵の公園は、1759年に英仏軍の激戦の舞台となった決戦場で、「アブラハムの平原の戦い」とも呼ばれている。このことは「カナダの概要」でも記述した。

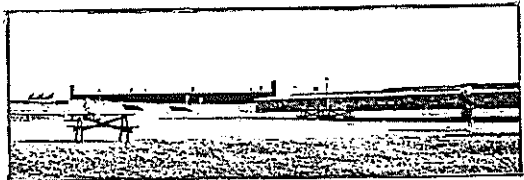
ケベック建設以来、フランスは何回となくイギリスと戦闘を繰り返してきたが、この戦闘でイギリス軍は決定的な勝利をおさめ、ケベックがイギリスの支配下に入ることを運命づけた戦闘であった。

辛勞辛苦して建設したケベックは、1763年のパリ条約でイギリスの植民地となった歴史に無常を感じ、寂寥として腰間に秋水(軍刀)を帯びていた昔を思い出しながら、セントローレンス川に臨んだ「ダイヤモンドの丘」に歩を進めた。(19頁地図中央下)



悠然とした流れの上に広がった丘に立つと、紅葉美の極致に酔うような壮観な展望が開け、川淵に降りる階段の下には板張りの遊歩道が伸びていた。この遊歩道を土地の人は「知事の散歩道」と呼んでおり、古城のようなシャトー・フロンテナック・ホテルまで続いていた。(上の写真は知事の散歩道、白く見えるのは紅葉)

散歩道の左上に見える丘を「ケベック城塞」(シタデル)と称し、1820年から12年の歳月をかけてイギリス軍が建設した要塞であった。(19頁地図中央右下)



現在はカナダ第22連隊が駐屯し、カナダで唯一のフランス語だけを話す部隊として有名だと、ガイドは説明していた。

(右上の写真はケベック城塞の一部)

丘の上に立って一大パノラマを眺めていると、フランス人探検家シャンプランが大西洋からセントローレンス川を遡航し、1608年(日本では江戸幕府が開かれて間もない時代)に城塞を築いた歴史が偲ばれてきた。

太平の世に慣れて有事の時のことを夢にも考えず、目先のことばかりに捉らわれている何処かの国の若者よ、平和の中にも戦争の危険が芽生えていることを、自覚して欲しいものである。

乗車したバスが公園内をゆっくりと走ると、周りには平和の象徴である鳩のアパートの小屋が見え、一方では古代から現代までの大砲が50門ばかり据えてあり、戦死した軍人を追悼する碑も立っていた。

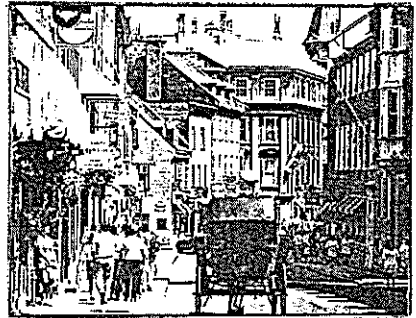
これらの英仏の戦いの跡は、私に「源氏の共食い」の諺のような感想を抱かせ、判官最原(ビイキ)の思いを持たせながら戦場公園を去った。

北に引き返すバスは再びカナダ唯一の古都であり、フランス文化の薫る城塞都市の旧市内に向かった。ケベックの町は至って小さく、今日も昨日と同様に「シャトー・フロンティナック・ホテル」の前で停車し、暫くの自由行動の時間が与えられた。

昨日の観光では中世の城館を思わせるホテルの内部は見学できず、私らは先を急いで人競り(ヒトセリ)の中に入った。クラシックでエレガントな内装は、古風な外観と違って近代的であり、一流のブティックや画廊などの店が連なり、ティルूमで休憩してみたいと思ったが、この服装ではと引け目を感じて中止した。

ホテルの前に立ってセントローレンス川を眺めると、今しがた訪れたアブラハムの平原(戦場公園)や、そこに通じる「知事の散歩道」が目に入り、古都ケベックが如何に小さいかに気付くのであった。

続いて一行は昨日同様、観光バスや観光馬車、観光客が人垣をつくる「ダルム広場」を通り、河畔の広場の「プラス・ロワイヤル」に停車した。(上は市内の風景、位置は地図の右上)

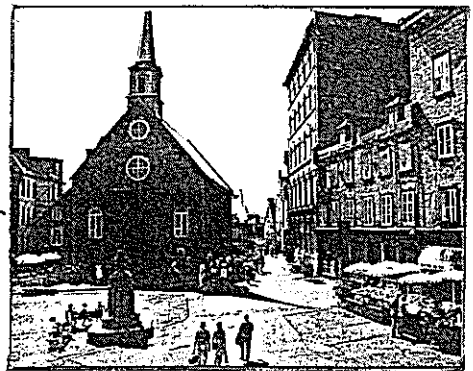


ルイ14世の胸像が立つこの小さな広場が、崖下の町の中心であった。1608年に上陸したシャンプランが植民地に住居を建設し、17世紀の半ばには市場が設けられて、裕福な家が建ち並ぶ商業の中心地となった。

今も広場の周囲には古い石造りの家屋が残り、南側には「勝利のノートルダム教会」が建っている。(位置は地図の右上)

(右は勝利のノートルダム教会と石造りの町)

ノートルダム(我等の貴婦人の意)とは聖母マリアのことである。1688年に創建されたこの教会は、1690年と1711年の2度の戦いでフランス軍がイギリス軍を打ち破り、それを記念して建造されたという由緒ある歴史をもっている。



ケベックには200の教会があると言われているが、市民の心の中にひめるカトリックの潜在的な影響力は矢張り無視できないようで、この地こそ北米におけるフランス文明の発祥地であった。

教会の直ぐ東を流れるセントローレンス川には、世界一周の旅をする豪華客船ロイヤル・プリンセス号が岸壁に横付けになっていた。乗客は我々と同じくケベックの歴史探訪と紅葉観賞が目的のようで、古都の町は世界中の憧れの的となっていた。

ロイヤル広場から昨日も歩いたプチ・シャンプラン通りの古い街並みを散策し、崖を繰り抜いて造った「地下ワイン工場」を見学して、再び漫ろ歩きを続けていた。

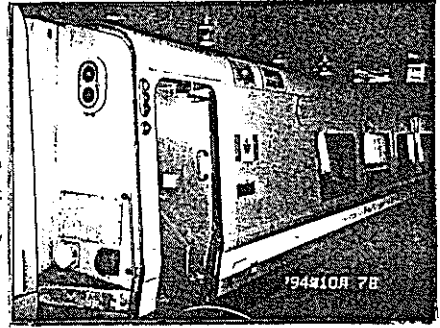
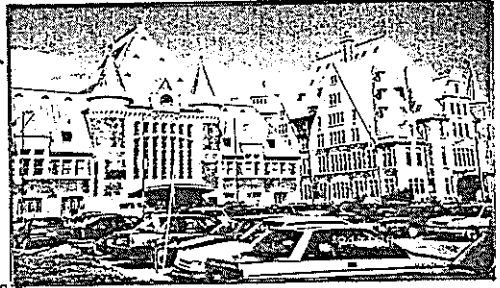
すっかりケベックの町の地理を覚えた私らは、ケーブルカーを眺めながら坂の街を登り、ノートルダム聖堂や市庁舎の建つダルム広場に出た。ここでフランス情緒があふれる市内観光も終りとなり、駅に向うことになった。

フランス植民地時代にはカナダの首都であったケベックは、北米唯一の城砦都市としてユネスコから文化遺産として認定されている。それだけに凡ての面で我々はケベック狂になり、誰しも今次紀行の最大の圧巻の地となったことだろうと思いながらバスに乗車した。

東京駅はオランダの首都アムステルダム駅の模したと言われているが、ケベック駅もそれに似た感じの建物で、洒落た表情をしていた。

自然と歴史と魅惑のケベックに各人各様の懐かしい思いを残した一行は、午後3時発の大陸横断鉄道VIA RAILに乗車し、モントリオールまでの約3時間、紅葉のメープル街道を車窓から眺める鉄道の旅でエンジョイすることになった。

(上の写真はケベック駅の景観、下の写真はVIA RAILの客車)



ケベック～モントリオール 鉄道の旅

流星に乗って紅葉の大陸を横断するような車窓からの展望は、カナダの歴史と大自然の豊かさを雄弁に物語り、トレード・マークのメープル・レッドに染まった景観は、途切れることなく延々と大陸を覆っていた。

カナダ開拓の歴史上、大陸横断鉄道は欠くことのできない存在だと思いながら、サービスされたお茶を飲むのも大陸的であった。

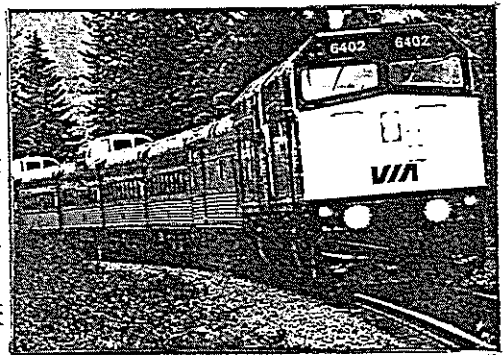
次々と車窓に迫ってくる変化に富んだ風光を楽しみ、一体「燃えるような紅葉」などと修飾される色付きの原因は何か、と遠い昔に学んだことが思い出されてきた。

しかし記憶に残っているのは寒冷の温度差ぐらいで、帰国してから調べることにした。

(上の写真は大陸横断列車 VIA RAILの景観)

林野庁の森林総合研究所の記事によると、最高気温が15、6度以下になると紅葉が始まると書かれていた。そして赤い「アントシアン」という色素が合成されるためには、①一度気温が下がったら着実に続くこと、②日中は比較的温かくて夜冷えるという温度差があること、③日がよく照ること、などが条件とされていた。

これでも良く理解できず大群林を繙くと、葉柄の基部に離層が形成されて、移動で



きない糖類が赤色のアントシアンに変わるために起こり、特にカエデ属が著しいと記載されていた。

又、アントシアンとは植物の花、葉、果実などに含まれている色素群で、水に溶け、酸性は赤色、アルカリ性では青色を呈すと書かれていた。

要するに気温が下がってくると、木々の葉で作られた養分が茎への移動が困難となり、葉に糖分が蓄積されてくる。この糖分が作り出す色素が葉を染め上げ、赤い色素は赤外線を吸収し、その熱で木々の体温を高めて寒さに耐えるのであった。

だから紅葉は気温の降下が激しく、空気が澄んで赤外線の透過の良いところが美しい。カナダのメープル街道はこの条件に合致しているのである。

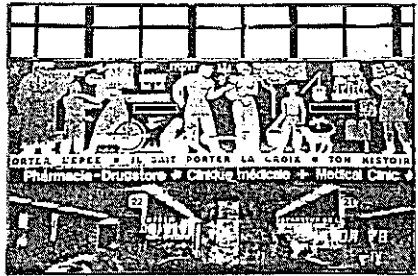
ここかしこに湖沼が点在する地形はカナダの特徴で、天が絶妙に配置する紅葉と相俟って風情に魅力を増していた。しかし日本のような真っ赤に染まった「もみじ」が見えないのは、少々物足りない感じがする。ガイドの説明によると、それは土壌の関係で「もみじ」は育たないとのことであった。

何処までもつづく広々とした沿線には大牧草地帯も拡がり、懸命に草を喰むホルスタインもおれば昼寝をしている牛も見えている。寝牛に釣られたのか、紅葉に酔って朦朧となつたのか、私は広いシートをリクライニングにして、「寝る間は仏」と自然に無我の境に入ってしまった。

綾羅錦繡のような風光の屏風に囲まれた中を、駿馬のように快走したVIA大陸横断列車は、午後6時にモントリオールのウインザー駅に滑るように到着した。

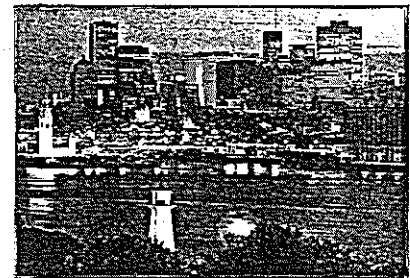
震んで薄暗い地下ホームに盧生の夢を見たような感じで降り立つと、通路の上に諸民族の歴史を描いたレリーフが目映ってきた。

征服と隷属、栄光と屈辱、妥協と共有という過去をもつカナダの歴史をよく表現していると、興味深く眺めて素早くカメラに収めた。多民族国家の悩みは、数千年も経たないと解消できないのではないかと思ひながら先を急いだ。(右は歴史のレリーフ)



ホームから階段を上った待合所は豪華絢爛で、人口300万のカナダ第2の大都市の面目を保ち、駅前立つ貿易センターの高いビルの灯が煌々と輝いていた。しかし地下街が発達したこの街の人達は地下に姿を消すのか、構内の人影は想像できないほど閑散としていた。

ウインザー駅に近い25階建てのホリディン・ホテルに旅の疲れを癒すことになり、夜景を楽しむことが習慣になっている私は、暫く窓際に立っていた。これはまた爛灯の美を眺めて出来るだけ街の地理を把握したい為でもあった。(右は美しい夜景)



ホテルのレストランでの夕食が終り、部屋でゆっくりと寛ぎながら、人生の疲労は年齢には関係なく、心の持ちようによって楽しくなるのだと、今日一日を振り返っていた。

夢を追って思い出をつくり、それを悦びと感ずることが出来れば、それほど美しく素晴らしい人生はないと思ひながら、寝心地の好さに引かれて床に入った。

10月7日 (金) 晴 我利我利亡者の添乗員

今日は市内観光の後、ローレンシャン高原を踏破してオタワまで疾走する570kmの強行軍の予定で、早朝6時のモーニングコールは未だ毛布の温もりが名残り惜しい感じがしていた。

部屋の窓から眺めるモントリオールの市街は、島だけに数本の橋がセントローレンス川に架かり、その景観は「北米のパリ」と絶賛されるだけあって抜群であった。

出発までの時間は余りなく、急いでバイキングのレストランに行ったところ、なんと数十人の客が列をつくって席の空くのを待っていた。しかし、30分も立ち続けて待っていたが一向に進まない状態であった。

その時、後からきた20人ばかりの日本人ツアーの連中が、行列をつくっていた我々を追い越してレストラン内に入った。日本人よりも数の多い白人達の列の間から、不平の声が上がったのは自然なことである。

「家鴨(アヒル)も鴨の気位」の諺がある通り、経済面では日本より劣るとは云え気位の高い白人の声は当然で、彼ら一団の鉄面皮な行動は許す訳にはいかない。

ツアーの人が未だ集まらないのか、その人を捜す若い女性添乗員がレストランから出てきた。人生の経験も知識も若い添乗員より優れ、気概に富む正義漢を自負する私は間髪を入れず、添乗員をつかまえて無謀な行動を説破した。

すると、彼女の返答は「席を予約してあった」というのである。日本人や白人が行列して待ち倦ぐねている人達の心理を少しも解せず、添乗員は特権階級だという意識が強かったのであった。

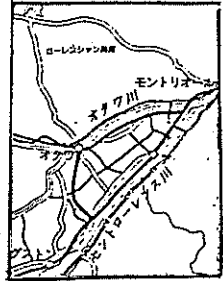
多くの客に迷惑を掛けることを顧みず、テーブルの数が少ない狭いレストランの状況を知っている彼女は、ホテル側の添乗員に対する弱みに付け込んで、自分のツアーだけが良ければと席を予約していたのである。

朝の慌ただしい時に各ツアーが席を予約したならば一体どうなるのか、と心を配らない身勝手な考え方は公德心を無視している。その高慢な行動は他を見くびっている愚かさの現われであり、平等を破壊する高満な精神は憤慨に堪えなかった。

自分だけの利益を最優先にして、他人や全般の利害を考えない利己主義は日本の恥だと質したところ、近畿ツーリスト渋谷支店のツアーと答えた。我々一行も同じ支店のツアーであり、断然抗議しなければならない。

日本人は経済大国になったことに自惚れ、人道大国になることを忘れるという愚が横行し、戦後教育の一大欠陥を暴露していた。唯一人の添乗員の行動が他国民に悪影響を及ぼすことを考えれば、添乗員は外交の先端に立つ者だと自覚すべきである。

戦後60数回に亘って海外旅行を経験している私が、このような浅はかな考え方の添乗員を見たことがない。殆どの人達は各々ツアーを組んでいる白人や日本人で、それを無視して自己の利益だけを考える我利我利亡者に、強い怒りを覚える不愉快な朝であった。



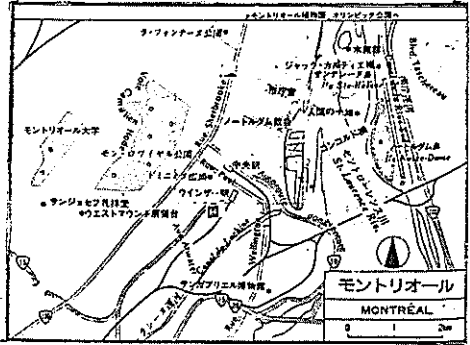
モントリオール市内観光 (下図参照)

見馴れたはずの朝の光景が今日に限って新鮮に見えたのは、レストランの一件があった性だろうか、と思いながら乗車したバスは8時に出発した。

我々の宿泊したホテルもある旧市街は、100年以上もたった古い石造りの建物が多く、灰色がかった感じの街並みが続いていた。

この旧市内は1462年にフランス人のメゾンヌーヴが上陸したモントリオールの発祥地だけに、道幅は狭くて行き交う車両の数も至って少ない。

ダウントウンの中央にある「ドミニオン広場」(地図の中央)は小さな広場で、木漏れ日が柔らかくさす静かな公園の中から、鳩に餌を与えている人影が見えていた。バスはドミニオン広場から大通りに出た。ここが黄金の道と言われるゴールデン・スクエア・マイルで、富を支配していた面影を残すモントリオールの五番街であった。



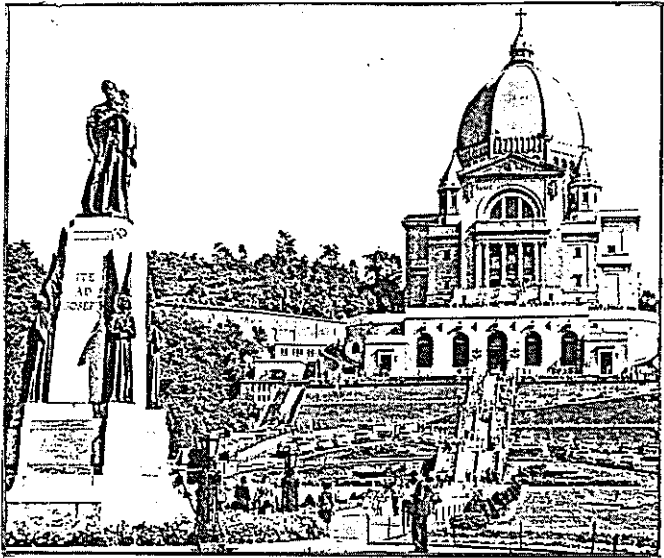
その通りにあったマルギ大学のキャンパスを左に見ながら、全面に大きく横たわる丘に向かって進んだ。そこが目的地の「モン・ロワイヤル公園」である。

モントリオールの名の由来ともなったロワイヤル山(233m)は、山全体が綺麗に整備された市最大の公園となっている。

そしてニューヨークのセントラル・パークを設計した造園技師によって造られたのであった。

モン・ロワイヤルの丘の麓には天高く聳えた巨大な聖堂が建ち、これが「聖ジョゼフ礼拝堂」の荘厳な姿であった。

(右が聖ジョゼフ礼拝堂)



カナダの守護人・聖ジョゼフに捧げられたこの聖堂は、ケベック州の三大巡礼地の一つになっている。もとは「奇跡の人」アンドレ修道士が建てた数十m四方の礼拝所だったが、彼の死後その熱意が原動力になり、1924年から新しい建設が始まって1960年に完成したものであった。

ガイドから概略の説明を受けたのち、一行は襟を正して内部の拝観に移った。杖を頼りの私は高い礼拝堂に登れるかと案じながら堂内に入ると、なんとエスカレーターまでも設備され、内外ともに近代的な建物であった。

幾つかのエスカレーターに乗って先ず下の礼拝堂に入った。5600人が収容できるという大礼拝堂は、神をたたえ、罪の贖（アガナイ）と神の恩寵を祈願するミサが行われる場所となっている。

堂の奥に安置した白い像は遙か彼方に微かにしか見えないが、丁度、白装束を着た神父が聖母マリアの像の前に立ち、信者に向かって説教をしている時であった。また後方には5811本のパイプオルガンも見え、大礼拝堂の威厳を具備していた。

再びエスカレーターに乗って上の礼拝堂の見学となった。正面の壇上に木造の十字架が祀られた礼拝堂は大ミサの時にしか使用されず、天井が十字の形に設計されているのは珍しい構造であった。

年間200万人もの信者が訪れ、世界一の規模を誇る礼拝堂を驚異の眼で恭しく見上げていた。するとガイドは、礼拝堂を建てたアンドレ修道士は信仰の力で不治の病を直したから、「モン・ロワイヤルの奇跡」と呼んだのだと説明していた。

膝関節痛に悩む私は、礼拝堂にある奇跡によって病気が治ったという人々の松葉杖を、信じられない眼で見詰めていた。



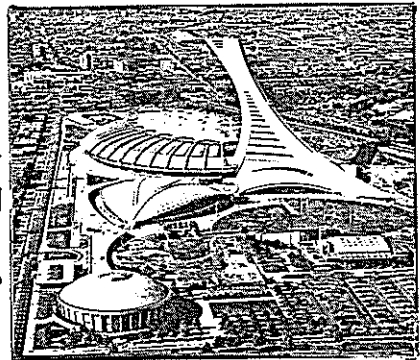
(上の写真は陳列された松葉杖)

フランス系のカトリックには奇跡を尊ぶ傾向があり、この礼拝堂もその例外ではなく、前々日に拝観したケベック郊外のサンタンヌ・ド・ボープレと同じであった。

私のような信仰心のない者にとっては「盲亀の浮木」（モウキのフボク）の諺の通り、神の教えに出会うことはないようである。

礼拝堂を出て広場に立つと、一望のもとに広がるモントリオールの市街は手にとるように見え、この丘もまた俗世の煩わしさから逃れるように、紅葉に染まっていた。

180度に広がるパノラマの中には「百塔の町」と言われるだけに尖塔が多く、又、記憶に新しいモントリオール・オリンピック・スタジアムのドームも見えていた。



この8万人を収容できるスタジアムの完成は、オリンピック終了後14年もたってからである。開閉式の屋根を注文してパリから届いたのは5年後で、設置する資金ができるまで更に数年を要したのであった。（右はオリンピック・スタジアム）

スタジアムに併設した傾いている塔は、傾斜塔としては世界一を誇り、高さ190mの展望台から晴れた日には80km先まで見渡せるという。

モン・ロワイヤルの丘の下には礼拝堂と相対して神学校があり、その前の道を下ると大墓地群が延々と広がっていた。これは世界第7位の墓地らしく、今では土葬ばかりではなく火葬も認可されていると言う。

一方、墓地と反対側の丘の上に巨大な十字架の塔が立っていた。この鉄製の十字架は、モントリオールを最初に建設したメゾヌーヴが、洪水からの加護を祈って建立を

約束したと云う故事にならって、1924年に立てられたものである。

ライトがついた夜の十字架は闇の中に浮かび上がり、時には100kmも先から見えると云われ、古いものと新しいものが融合するモンリオールを象徴しているのであった。

モン・ロワイヤル公園から一行は旧市街のダウンタウン（第2次大戦までは新市街）へと移動して、モンリオールの発祥地に建つ「ノートルダム教会」の拝観となった。（右はノートルダム教会の外観、位置は27頁地図の中央右上の河畔）

プラス・ダルム（広場）の前にあるネオ・ゴシック様式の教会は、1829年に創建された北米を代表する教会で、旧市内の観光名所の筆頭である。そのために観光バスで一杯であった。

この教会の見所は1874～1880年にかけて全面的に改装された、内部の装飾だと言われている。声一つない荘厳極まる教会内に静々と脚を運ぶと、一瞬、信者でなくとも神秘的なものを感じてくる。

気高く重々しい威厳が隅々まで行き渡り、エメラルドがかった青色の天井と、コバルトブルーの軟らかいライトで照らされた祭壇が、遠くに浮かび上って輝いていた。

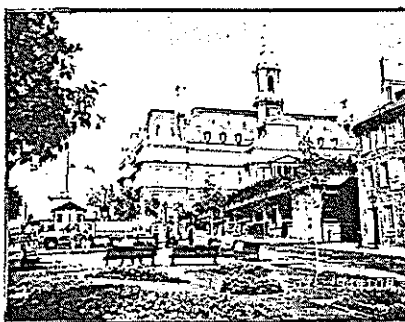
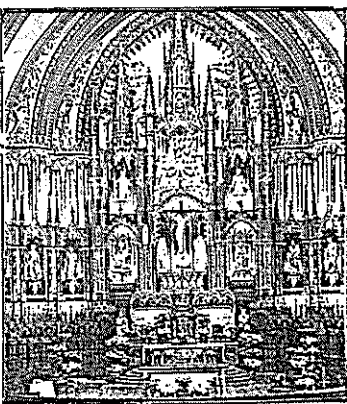
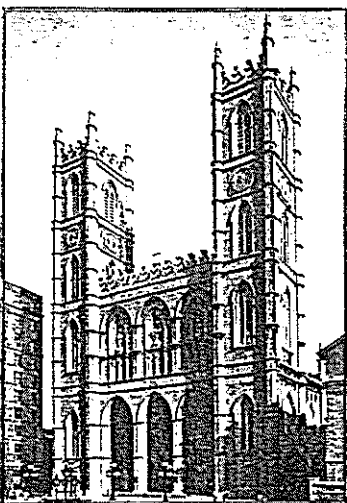
モンリオールがヴィル・マリーと呼ばれていた頃の様子を描いたステンドグラス、それを通して射し込む光何百本ものキャンドルの灯、それらは日常の感覚世界を脱したもののように見えていた。

さらに聖堂の奥まで息を殺して近づいていった。そこに鎮まる壮麗な礼拝堂は絢爛豪華な黄金色で装飾され、内陣にあるパイプ・オルガンは5772本の最大級のものであった。（右は教会の奥の豪華絢爛な祭壇）

続いて一行はセントローレンス川に沿った道を北に進み、車中から美しく花一杯で飾った花壇を前にする市庁舎を眺め、繁華街の中にあるパルマス・ショッピングセンターで休憩となった。

櫛の歯のように高層ビルが建ち並ぶモンリオールの市街は、外見は活気に溢れているように見えるものの、自動車の数は非常に少ない。それは地下鉄や地下街の発達のために人々は地下に潜っているのであろうか。（右は市庁舎の景観）

半年間もつづく冬の凍て付くような寒さから凍結する路面を想像すると、雪国に生活する私でさえも身震いを感じてきたが、若いこの街は人口の増加に伴って、偉大な発展を遂げる兆しが充満しているようにも見受けられるのであった。



18世紀にヨーロッパではビーバーの毛皮が大流行し、そのためにヴィル・マリイと呼ばれたモンリオールは毛皮の貿易で華々しい発展を遂げたが、これからも豊富な天然資源を活用して一層の発展を祈り、10時に市内観光の幕を閉じた。

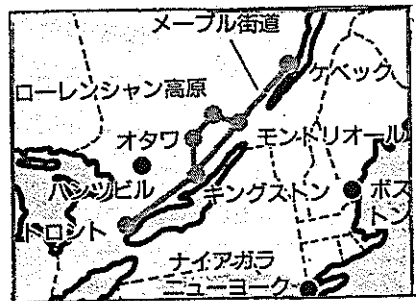
モンリオールからオンタリオ湖までの300kmの間は、浅瀬があるために大型船の航行は不能であった。しかし5年の歳月をかけてセントローレンス水路が完成し(1959年)、1万トン級の船も五大湖の奥深くまで航行可能となった。

我々はカナダの大動脈であるセントローレンス水路を見ることなく、紅葉を求めて北方のローレンシャン高原に進むことになった。モンリオールに滞在した時間は僅かであったが、この地を訪れた喜びは計り知れないものがある。

ローレンシャン高原～オタワ (下図参照)

セントローレンス川に架った橋を渡った対岸は、モンリオールの開拓と同時に手が入り込まれた地域で、開拓の歴史を伝える古色蒼然とした家が見えていた。

(右は古い石造りの家)



どことなく当時を偲

ばせる古い屋敷や、昔ながらの畑が広がる街道を走り、まもなく全長8000kmの大陸横断ハイウエーに入った。世界最長のハイウエーを突破するには1週間はかかると言うから、考えただけでも大地の広大さが窺える。

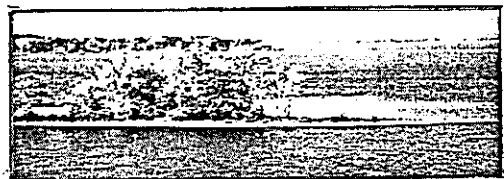
大自然と会話をしているような感じがするドライブは少しも嫌なものはなく、誰にも束縛されずに自然を楽しむ心情は、老いを忘れさせる秘薬のようであった。

ハイウエーの左に大陸横断鉄道が平行して走り、銀色の帯を流したようなオタワ川が見え隠れする、悠然とした眺めは大陸的な薫りが漂い、カナダブルーの青空も秋の真っ盛りを告げるようで、我々の心がはしゃいで来るのであった。

カエデの赤や黄の色の塊がぐんぐん接近して来たかと思うと、すうーと蒼空が割り込み、バスの窓際まで紅葉の錦模様が迫る光景は想像以上で、旅の疲れも忘れさせる大満足の連続である。

ローレンシャン高原に入ってからからの迫力に、我々の視神経は応接に暇がないほど忙しくなっていた。このローレンシャン高原こそ今度メープル街道のハイライトで、燃えるようなメープルレッドに染まった景観は、日本では見られない感動的な絵巻物と云わなければならない。

果てしなく広がる錦繡の世界にはまた数え切れない大小の湖が点在し、湖面に揺らぐ倒影は我々を息を飲むように引き込み、湖畔に佇む瀟洒な別荘などもあり、

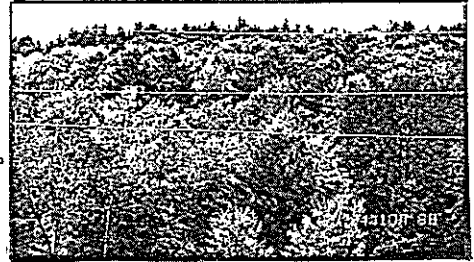


言葉を失うような美観が切れ目なく続いていた。(前頁の下の写真は、湖中の小島が真っ赤に染まった光景。白く映っているのは紅葉)

ダイナミックな紅葉を觀賞する絶好機と天候に恵まれた我々は、2万km²の広さと7万個の湖の広がるローレンシャン高原を、身も心も赤いカエデに染まって走り続け、漸くガソリンスタンドでトイレ休憩となった。

なだらかな丘陵地帯の谷間にある休憩地は、原生林の生い茂る山並みが街道まで迫り、錦秋の彩りもまた洪水のように押し寄せ、壮観な光景は我々の身を包む思いの充実感を呈していた。

発車したバスは再び名にし負うローレンシャン高原の中に消えていった。見渡すかぎりの彼方まで彩りを添えた色模様を驚嘆し、夢のような思いは一炊の夢を見ているような錯覚を覚えるのであった。(上は紅葉の美観)



何処までも続く樹林と点在する湖沼の美を堪能し、都会の喧騒から逃れて車の振動に揺られていると突然、バスは左折して針葉樹の枝が覆いかぶさる林の中に入った。

原生林の開けた空間に建っていた風変わりな建物の前でバスは停車した。これが高級リゾートとして脚光を浴びている、「ホテル・シャトーモンテベロ」であった。

杉と松の1万本もの丸太を組合せて作った超高級リゾート・ホテルは世界最大のロングキャビン(丸太小屋)で、オタワ・サミットも開かれたという由緒ある建物である。

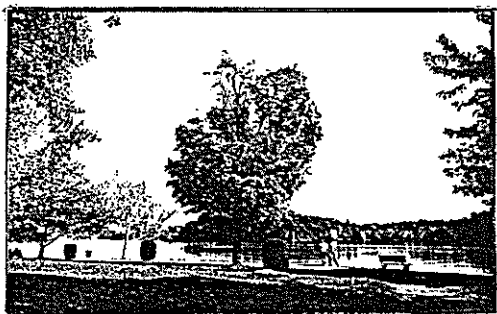
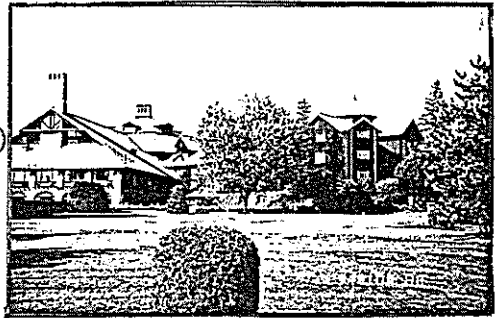
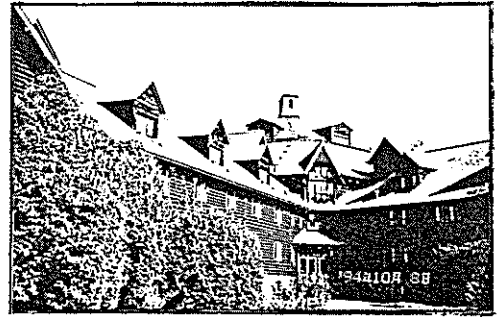
各種の国際会議場として使用される山小屋風の薄暗い玄関ロビーに入ると、丸太で囲まれた大きな暖炉が中央にあり、いかにもカナダらしい雰囲気を楽しむことが出来るのであった。(カナダとは「インディアンの家」の意)

ホテルの1階はロビーやレストラン、郷土色の豊かな売店などが並び、客室は2階以上で、建物は翼を拡げたように四方八方に伸びていた。

(上2枚の写真はホテルの建物の一部)

木の持った柔らかな感触が存分に生かされたレストランで、開拓の歴史を伝えるようなカナダの香りを味わいながら、我々は遅い昼食をとることになった。

食事が終わって広々とした庭園の木立の間をのんびりと散歩した。澄んだ美味しい空気を腹の底まで吸い込みながら、芝生の緑の絨毯を踏み締めていくと、敷地を染め上げた紅



葉の世界が展開し、その艶かな眺めは王侯貴族の豪壮な生活に浸っているような感じであった。(前頁の下の写真はオタワ川の流れと紅に染まった木立の光景)

清冽なオタワ川のゆるやかな流れは、紅葉美に花を添えるように調和し、その中に時おり顔を見せる小さなリスの演出を眺めていると、私の心は恋の虜になってしまった。

幽遠の境地で見た優雅な景色は忘れられず、一度はこのホテルに泊まってみたいという悲願を残し、再び大きく包み込んだ自然の織り成す高原へと、別れを惜しんで出発したのである。

俗世の煩わしさを超越して悠々閑々としたシャトー・モンテペロの印象は、余韻嫋々として何時までも消え去らず、私の山水の趣味に取り付かれた「泉石烟霞の病」は高まるばかりで、胸の中は益々燃え立つてくるのであった。

行く手に見える圧倒的な量と質の錦繡には広大な遠景があり、覗き込むような俯瞰もあり、鼻先をこするほどの至近のものまで、目に映るものは全て絵に描いたような景観で、酔いが覚める時がないほどである。

このような街道も、住む人にとっては「住むばかりの名所」の諺の通りかもしれない。よそ目には景勝地として羨ましいと映るかも知れないが、そこに住んでいる人にとっては単に生活の場所に過ぎず、特に良いわけではない。

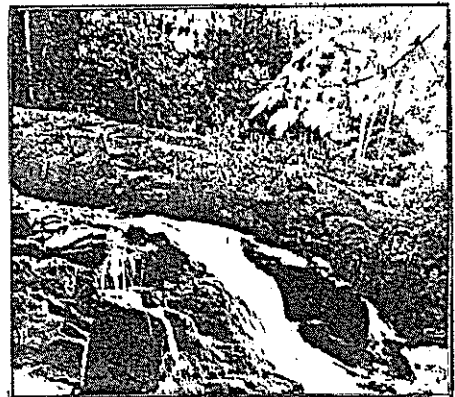
また上り坂もあれば下り坂もある街道は、一生の間に良いときもあれば悪いときもあり、世の中は月夜ばかりではなく闇夜もあるのだと、自戒を教えるようにも見えていた。

そのような感傷に耽っていると、広大な放牧場には草を喰む牛や寝ている牛も見えてきた。見るのは法楽の風景は流石に感動も薄くなり、満腹感から睡魔に襲われて、寝るほど楽はないと自然に佳境の眠りについた。

眠りから覚めると車内には誰の姿も見えない。眠っている人は寝かせておけと言ったツアーの人の好意と受け止めて車窓を覗くと、湖は狭まって湖水は滝のように流れていた。

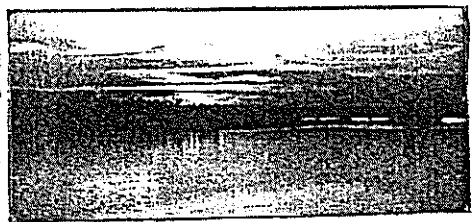
醜いものには鈍感だが、美しいものには敏感な神経が働き、好機逸すべからず車から飛び降りて、手つかずの清らかな自然に向かってシャッターを切った。その光景は滄海変じて桑田になったような素晴らしい眺めであった。

(右は湖水が流れる滝と紅葉の美観)



細い流れが滝のように見える岩の上を紅葉が美しく彩り、淵には名も知らぬ可憐な草花が「年々歳々花相い似たり、歳々年々人同じからず」と咲いていた。

金では買えない錦の屏風をめぐらしたような北の大地は黄昏どきを迎え、明々赫々として濃艶な世界の隅々まで照らしていた太陽が傾きかけると、紅葉の大樹が空を隠して水に映る紅も黒くなり、無常迅速のように憂愁を催し始めてきた。(右は落日の湖水の光景)



刻一刻と西の湖面に沈んでいく入り日は、長い時が育ててきた数個の湖水に重なるように姿を映し、夕日隠れを繰り返す落日をバスの中から凝然として見詰め続けた。

わずかに黄みを帯びた茜色の空が暗赤色に染まると、オタワの町が接近してきた証拠か、ヘッドライトを照らした対向車がぐんぐんと多くなり、黒ずんだ彼方の空を透して高層ビルの影が次々と現われた。

出会いが難しいと言われたローレンシャン高原の百彩の楓に征服感を覚え、私の旅の歴史の一頁に、功を成し遂げたような錦を飾ることが出来た喜びを噛み締めて、オタワのシャトー・ローリエ・ホテルに降り立った。時は午後6時半である。

ホテルの横を流れるリドー運河には運行する船の姿は見え、部屋の窓から見下ろす市街は既に闇に包まれていた。その暗い中に不思議にも、カナダ建国の思想的基盤を作った熱烈な国家意識の樹立という灯が、瞬いているような感じがしていた。

表紙で書物を判断してはならないのと同様に、外観や最初の一目で人や物を判断してはいけない。要は内なるものの問題で人間も外見や形式にこだわらず、心を知ることが肝要だと窓際に立って眺めていた。

ローレンシャン高原の何所までも広がっていた黄と赤の色調美が臉に浮かび、血圧が上昇して脈拍が乱れるような姿を思い出し、愛着に浸りながら吉夢を期待して眠りに就いた。

オタワの概要

カナダという名称は、英国領植民地の一つ「カナダ植民地」に付けられた名前である。今のオンタリオ州とケベック州は、ほぼこのカナダ植民地に含まれていた。

ケベック州は、もと仏領北米植民地の中心であったことや、現在でも仏系カナダとして英国系の諸州と一線を画していることは、前記した通りである。

カナダ植民地は1791年の段階では英系と仏系に分割されていた。この背景には1776年のアメリカ合衆国の独立があった。

独立宣言後、アメリカの政策を嫌った国王派（親英派）が大量にカナダに流入し、英系仏系の両カナダにも1万人の国王派が押し寄せた。当時このオタワ地域はモンリオールを中心にした仏系住民の世界であったが、フランス風の習慣を嫌った国王派たちは、英系の地域社会を形成していった。

これが切っ掛けとなって英系と仏系に分割され、その境目となったのがオタワ市の北を流れるオタワ川である。現在でもオタワ市の対岸のハル市はフランス語圏のケベック州であり、この国の性格に相応しい。

当時のオタワ周辺は先住民であるインディアン以外には定住する人はなく、白人が住み着き始めたのは1809年以降であった。その後木材の集散地として木材人足が集り、毛皮の交易所の役目を果たす村となった。

オタワ周辺が注目を集め始めたのは、1812年の戦争が切っ掛けであった。18



12年戦争では米軍がカナダに侵入してきたが、戦争の結果、英仏両カナダは当面の脅威であるアメリカに対するため、底に確執を抱えながらも団結するようになった。これがカナダという国が誕生する大きな原因の一つである。

この戦争の結果、英国側はアメリカに近すぎるセントローレンス川に代わる水路を開設する必要を感じ始めた。そこで1826年、ジョン・バイ中佐によりオタワを貫くリドー運河の建設が行われた。このころオタワはバイ中佐にちなんでバイタウンと呼ばれていた。

その後1841年、英仏両系カナダが併合され、「カナダ植民地」が樹立して後日の連邦の核ができあがった。最初にカナダ植民地の首都が置かれたのはオンタリオ州の「キングストン」（前頁地図参照）であった。

その後1859年までの間にカナダ植民地の首都はモントリオール、トロント、ケベック、そしてまたトロントと目まぐるしく変わった。この底流にあるのは英仏両系の反目であった。

この悩みを一気に解決したのがビクトリア女王で、英系仏系の接点にあるオタワに植民地政府を置いたのである。これは一見、無造作の決定に思えるが、アメリカに離れているという戦略的な配慮もあった。

1867年、イギリスから自治権が与えられてカナダ連邦が成立し、同時にオタワも一国の首都となったのである。1900年にオタワは大火にみまわれて市の殆どが焼失した。しかし、これが現在の理想的な町作りの切っ掛けとなった。

オタワはアメリカ合衆国のワシントンと同じように、純粋な政治の中心都市として造られた町で、経済・産業から全く切り離されているから美しく治安もよい。

それだけに活気に乏しいのも事実だが、印刷、出版などの軽工業を除けば政府関連産業が中心で、国立美術館や芸術センターなどの観光が第2の産業となっているようである。

オタワの市名は、これから訪れるアルゴンキン・インディアンの一民族名に由来すると言われている。



ワールド・エアライン・ロードレース・94・オタワ
参加記念メダル

10月8日 (土) 晴 早朝の散策 (下図参照)

カナダを訪れてから早や5日を経過し、紅葉美の取りもつ縁から生まれた日本とカナダの繋がりを慶びながら、気温2°の冷澄な空気のみなぎる快晴の朝を迎えた。

旅の連帯感を肌感じて快笑を浮かべながら私らは、朝食を終わって融通無碍に早朝の散歩に出掛けることにした。

それは今朝、ワールド・エアライン・ロードレースが行われるため、午前10時まで市内の交通が遮断され、我々の市内観光の出発時間が延期になったからである。

ホテル(上地図の中央よりやや右側のH)を出ると、脚は自然にゴシック風の建物が聳える方向に引き釣られていった。人口30万の静かな街は美しく整備された公園のようで、ビクトリア女王によって首都に選ばれた価値を十分に現わしていた。

ホテルの横を流れるリドー運河に架った橋を渡ると、ロードレースに参加する各国選手たちは、鈍い旭光を浴びながら軽いトレーニング中で、選手たちが首にぶら下げた参加記念メダルが羨望的となってしまった。

歩道に据えたテーブルに積み上げたメダルを、蛾眉柳腰の白人女性が選手たちに渡している光景を見た私は、恥ずかしい思いをしながら厚かましくねだってみた。すると友好親善と思ったのか幸運にも進呈してくれたのである。

「カナダ・ウエルカム・ワールド94・オタワ」と刻印したメダルを吊るしてランナたちの中に入ると、レースに参加した一人の日本人選手と出会い、記念の写真を撮影して手を握り合い健闘を祈って別れた。彼の青年は胸にJALのマークを付けていたが、アドレスを聞くのを忘れたことが残念である。

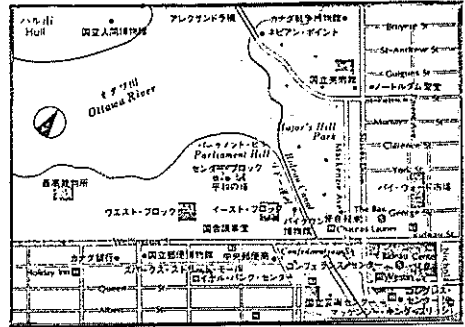
(右はロード・レースに参加した日本の青年)

ランナたちの群がる大通りに面して広い公園が広がり、公園の奥に国のシンボルである「国会議事堂」や、国の中枢機関の堂々としたゴシック建築が勢揃いしていた。(上地図の中央が国会議事堂)

公園内は入れないため反対側の広場に足を運ぶと、中央に巨大な「戦没者記念碑」の像が立っていた。(後刻調査した結果、ここはコシフェデレーション広場であった) 碑の天辺には神に捧げる神聖な聖火と、名誉を称える月桂冠をもった二人の女性像が据えられていた。

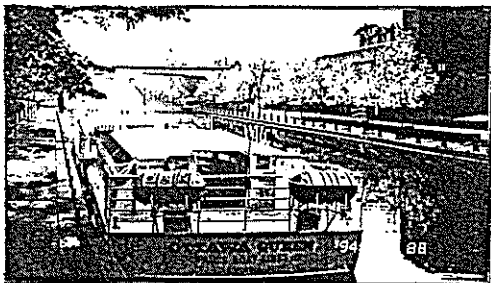
碑塔の正面には、1914～1918年の第1次世界大戦で戦死した戦士を記念する歩兵と騎兵の像があり、裏面には、1939～1945年の第2次世界大戦を記念する砲車と砲手の像があり、敵国ながら心から敬意を表して辞去した。

戦没者記念碑の広場とシャトー・ローリエ・ホテルの間に流れる水路がリドー運河



で、市街を東と西に分けている。西側の国会議事堂前の通りがウエリントン・ストリートで、東側はリドー・ストリートと名称を変えている。

「リドー運河」はオンタリオ湖からオタワまでの約200kmをつなぐ運河である。パイ中佐によって1826年から6年の歳月をかけて造られ、セントローレンス川とオタワ川を結ぶ全長12kmの重要な水路として役目を果たしてきた。



リドー運河には川から入口にかけて8基の水門があり、川の高低差を利用して船がスムーズに通れるようになっている。(上リドー運河と遊覧船、堤防の紅葉)

橋の上から眺める運河には、真下にあった遊覧船は紅葉に包まれる中に係留され、水路彼方の遠くには水門も見えていた。この水門は現在でも人力で開閉する珍しい存在だと言われている。

世界へ窓を開くワールド94・オタワ・ロードレースで、旧知と邂逅して久闊を新たにしようとした日本人青年の姿が何時までも眼底に遺り、その出会いも旅から生まれた連帯感だという印象を残し、一時の朝の散策を楽しんでホテルに戻った。

オタワ市内観光

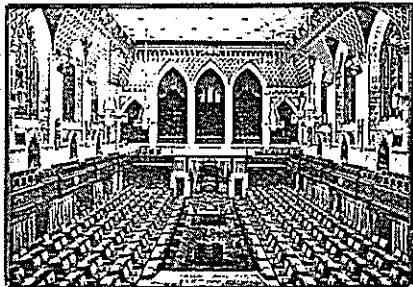
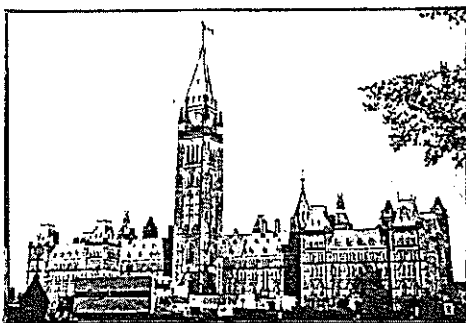
余りにも長すぎた自由行動の時間も漸く終わり、雲一つない澄みきった紅葉日和の中をバスは市内観光に出発した。

ランナで溢れていた目抜き通りも静けさを取り戻し、毛氈を敷いたような芝生の公園を通してバスは、先ほど眺めた国会議事堂の正面玄関で停車した。(右は国会議事堂の正面)

19世紀ネオゴシック建築の緑青の屋根は青空に映え、いくつも聳える塔の中で中央に聳えた高い塔は「平和の塔」と称し、第1次世界大戦で戦死した66,600人のカナダ将兵の慰霊のために建てられたものであった。

時計のあるピース・タワーの高さは9.89、5mで、内部には5.3個の鐘があり、毎日荘厳な音を響かせて霊を慰めていると言う。このことを耳にすると、我が国の為政者の戦没者に対する慰霊心の欠如に、憤りを覚えるのであった。

緑の広場の真ん中にあるセンチニアル・フレームの火は、カナダ建国100年目に当る1967年のニューイヤーの夜、灯されたもので、火を囲む噴水の周りには、カナダの10州と2準州の紋章が刻まれていると、ガイドは説明していた。(上は本議会議場の景観)



一行は数え切れない多くの参観者に混じって堂内に入った。一定の人数を決めて一定の時間の順送りに内部の見学に移ると、杖をついた私を見つけた職員は実に好意的で、車椅子を用意ませうかと声を掛けてきた。このようなことは生まれて初めての経験であり、感謝しながら辞退した。

時間も少なく急いでシャッターの透き間から本会議場を垣間見た。イギリス連邦国家の一員の国らしく、議場は平坦で上下の隔たりはない（前頁の下の写真参照）。一斑を見て全豹を卜することはできないが、違和感の旺盛な英仏両系で構成する国会の運営は困難だろうと想像し、カナダの国運の隆昌を祈って議事堂を去ったのである。

オタワの顔ともいうべき国会議事堂の立つ丘をパラメント・ヒルと呼び、議事堂に向かって右側は上院、下院議員のオフィスで、左側は迎賓館となっている。それらの重厚で壮麗な建物は他の都市では見られない光景で、おそらくカナダを思い出す時には、必ずこの景観が險に浮かぶであろう。（右は上下院議員オフィス）

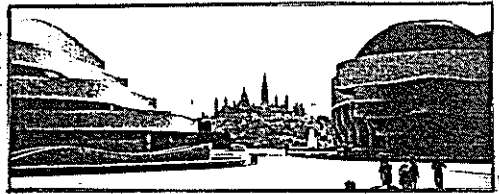


パラメント・ヒルを去ったバスはリドー運河を渡り、ホテルの前を通過して「パイ・ウード市場」の見学に移った。野菜、果実、チーズ、パン、花などが溢れるカラフルな市場は、掛け合う声も賑やかで活気があり、市民の台所を賄う市場周辺にはレストランも並んでいた。（位置は35頁地図の右側）

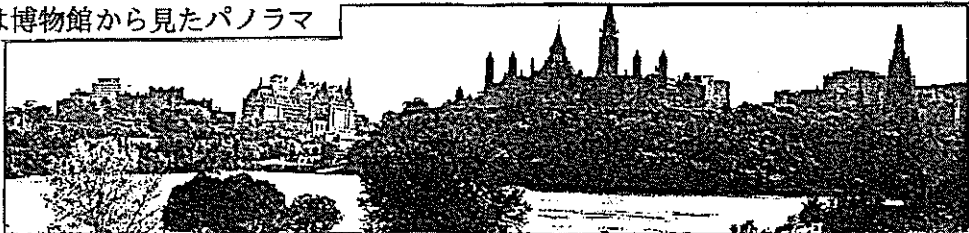
市場を離れたバスの中からノートルダム教会の尖塔を眺め、大きくカーブしてリドー川を渡った。リドー川の中の島にはグリーン・アイランドがあり、豪邸の立ち並んだ通りは紅葉の名所と言われるだけに、夢を追うような妖艶な街路樹が街道を染め上げていた。（位置は35頁地図枠外につながるの東北地区）

リドー川がオタワに流れ落ちる所の小さなリドー滝を過ぎると、カナダ首相の官邸や高級住宅街が姿を現わし、その奥まった一角は外国大大使館がつづき、中でも日本大使館の公邸は最高の構えであった。

オタワは政治の街で商業の街ではなく、殆どの住民の憧れは郊外のこの美しい地域に住むことらしい。自然と見事な調和を見せている心地よい此の地から、オタワ川に架ったアレクサンドラ橋を渡った。（地図の上部）



バスは国立自然科学博物館の広場で停車した。オタワ川に臨む丘の上に建った博物館は珍しい設計の巨大な建築で、二つの建物の間から見える国会議事堂の威容は、国家権力の最高を象徴する素晴らしい眺望であった。（上の写真は博物館と国会議事堂）
下は博物館から見たパノラマ



国立自然科学博物館の内部を見学する時間はなく、急ぎ足で河畔まで走った。そこには国会議事堂、議員宿舎、迎賓館をはじめ、我々が宿泊したシャトー・ローリエ・ホテルが紺碧の空と清らかな流れの中に映え上がり、清爽のみなぎるパノラマの壮観は抜山蓋世の気を充満させていた。(前頁の下の写真)

この景観を眺めて私の脳裏をよぎってきたのは、「万有は流転して栄えるものは必ず衰えるという歴史の示す不滅の鉄則」であった。そこで私は、カナダが歴史の教える運命の流れに抗して発展することを祈り、急いで河畔から引き返した。

バスは再び市の中心部に帰り、ホテルとパイ・ウード市場の中間にあったレストセンで昼食を撮ることになり、市内観光が終わりを告げたのである。

森と湖のリゾート・ハンツビルへ (下図参照)

昼食が終った我々はアルゴンキン州立公園を通り、西方約500km彼方のハンツビルに向かって出発し、カナダ最後のバスドライブとなった。

「紅葉狩り」という言葉が果たしてカナダにあるのだろうか、と思いながらオタワ川の悠久な流れとも別れ、錦繡の大地を北へと快走した。

アルゴンキン州立公園はトロント及びオタワの北約250kmにある7600km²の公園で、森と湖の自然が広がっている。

人にもまれ、時間の秒針に追い立てられるような日常に疲れた都会の人たちが、この公園で水の音や風の音に耳を澄まし、或は紅葉を觀賞して数日を過ごし、洗われたような心と体となって帰っていく所であった。

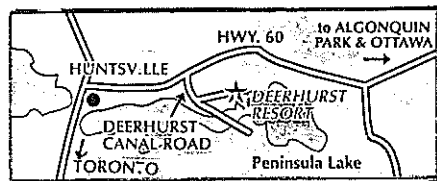
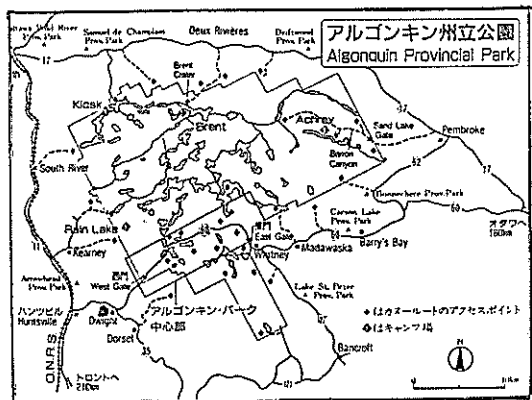
我々の目的地は、トロントから「オンタリオノースランド鉄道」で結ばれている、「ハンツビル駅」東方約30kmの「ディアハースト・リゾート」であった。即ち州立公園の最寄りの町がハンツビルで、公園の西側入口の基地のリゾートである。

(上の地図はオタワからハンツビルまでの経路、下はハンツビル駅周辺の拡大図)

オタワ市街を離れたバスは片道3車線の街道に入った。自動車の数は日本とは比較できないほど少なく、100kmを超すスピードで轟進を続けた。

車窓に映ってくるものは、カナダの自然が誇らしげな表情を見せる色鮮やかな色彩世界ばかりである。この街道もまたローレンシャン高原と同じくカナダを代表する紅葉の名所で、手づかずの自然は清楚な感じを帯びていた。

集落の少ない北の大地にもカナダ伝統の石造りの家や教会があり、我々の旅情をかきたてている。カナダに足を踏み入れて誰でも気付くことは、どんな田舎に行ってもキリスト教会が目に入ること、彼らの心の中に秘める魂の休憩所の感じがしていた。



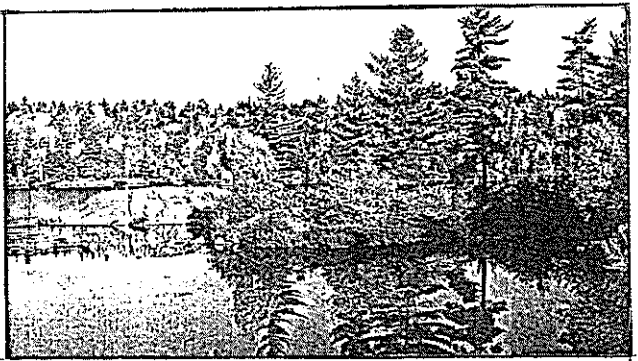
国道17号線（前頁地図の右側）を北上したバスは、やがて左折して国道62号線に入った。旅はエネルギーの教師だと言われているように、楓の千変万化する色模様を眺めながら一行は元気一杯、談論風発して時間の経過も忘れるほどであった。

引切りなしのガイドの説明に耳を傾けていると、大地の芸術というか、色彩の魔術のような綾羅錦繡の景観は、カナダに住む人であっても中々見られる光景ではないと、説明していた。幸運な快感を覚えて悦に入っていた私も、贅沢な感性に浸っていたのである。（上は国道62号線の紅葉風景）



国道62号線から60号線に入った。自然が大きく包み込んだ標高1000mの高原には、原始からの紅葉と共に数え切れない湖沼が点在し、水の色もそれぞれ違っていた。太陽の光でサファイアのように鮮やかなものもあれば、緑と赤の絵の具を溶かしたようなものもあり、五色の秋を感じるのであった。

息をのむような大自然の中の湖沼は我々を引き込み、湖を取り囲む樹々が湖面にその投影を映し、真っ赤な水面を見ていると自分の顔まで紅葉色に染まり、まるで絵の中に身を置くような感じである。（上の写真は湖水に映る紅葉風景）



氷河が造ったという湖沼の大きいものは琵琶湖よりも大きく、標高が高くなってきたのか一段と赤が濃くなってきた。湖に浮かぶような小さい島も錦をまとい、湖にせり出した楓の枝が水面に映って西陣織のようである。（右は湖に浮かぶ小島の風景、いずれの写真も白く見えるのは紅葉である）



街道の上に時々ビーバーが顔を出すとガイドが説明していた。頭と胴の長さが約75cm、尾の長さが約40cmもあるビーバーの優秀な毛皮が、白人たちの目の付けるところとなった。その捕獲から開拓へとカナダの歴史が始まったのである。

「梅に鶯、紅葉に鹿、牡丹に唐獅子、竹に虎」は、日本では絵になるものの組み合わせや、似合うものを指している。カナダでは「紅葉にビーバー」と言うのであろうかと、爛々とした眼で街道を凝視していた。

国旗にもなっている天地を覆うカエデは又、多民族国家の統合を表現しているのであろうか。小さな集落にも必ず真っ赤なカエデの国旗と、各州の州旗が掲揚され、精神的に愛国を訴えている光景は、羨ましい光景であった。

いくら言葉をつくしても高原の美観を語ることはできない。しかし、一行の中には

紅葉を楽しむ風流心を持ちながら、社会生活をする上で守るべき公德心（道徳を重んじる心）に欠けている人がいたことは、実に嘆かわしいことであった。

カナダ入国以来、我が娘と同じ年齢ほどの二人の若い女性は、添乗員が同行しないことをよいことにして、常にバスの特等席である前の座席を占領していた。明眸皓齒の面構えをした彼女等の思い上がり、礼に欠けた不遜な態度は許し難い。

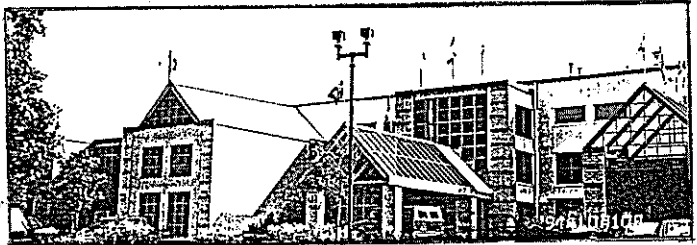
「仏の顔も三度」（仏の顔も三度なでれば腹が立つの意）の諺の通り、礼に欠けたことを何度も繰り返せば怒りの心が湧いてくる。「長幼序あり」（年上と年下の者とのきまり）という日本の美德を、戦後の教育では教えなかった結果だ。しかしこのような徳目は小学生でも知っている常識で、「才余りありて識足らず」と言わなければならない。

杖をついている私は足が遅いために常に後部座席に座らされ、バスから降りる時も一番遅くなる。それを知りながら毎回毎回、特等席に陣取る悖徳精神は厚かましさを通り超した鉄面皮で、如何なく女性上位を笠に着ていた。

最後の機会だと正義漢の私は、彼女らに反省を促すことも「長幼の序」の精神だと考えたが、我慢してくれと止める人も現われた。我が身をつねって人の痛さを知れというのであろうが、私も柳眉を逆立てするのにも性に合わず、中止することにした。

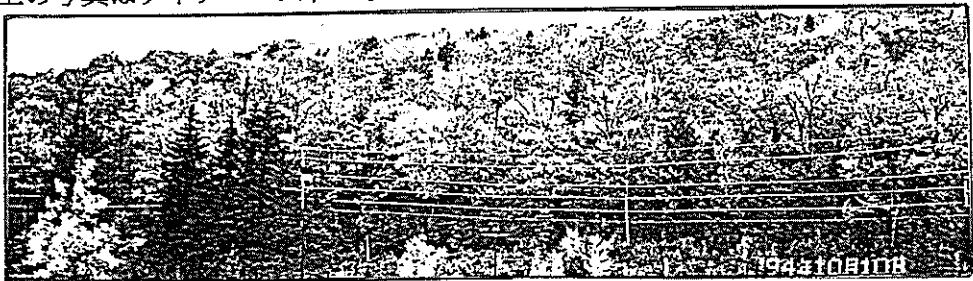
理屈が人間の皮をかぶったような、戦後の上辺だけの学問に疲労を覚えていると、夕日と紅葉が交わり合った光景が広がり、天も地も紅と黄の雨を降らす中をバスは突っ走っていた。

車は60号線から35号線に入ると直ぐ左折して、細くなった山道を進んだ。道路の両側からかぶさるように楓が紅葉のトンネルをつくり、前方にコバルト色に輝く湖水が見えてきた。



360°の錦のパノラマの中にグリーンの鮮やかなゴルフ場が現われると、バスは翼を上げたような青い屋根のモダンな建物の前で停車した。ここが目的地の「ディアハースト・リゾート」のセンターで、静寂が漂う憩いの里に相応しい環境であった。バスのドライバーは猛スピードで飛ばした結果、予定よりも1時間も早い午後6時に到着したのである。

（上の写真はディアハースト・リゾートのセンター。下はセンター前の紅葉の林）



ディアハースト・リゾート (下図参照)

自然保護の目的でつくられた敷地面積7600㎡の広大な自然公園、「アルゴンキン州立公園」への観光基地である「ディアハースト・リゾート」は、「サンセット・ベイ」に面したホテル兼リゾート地であった。

膨大な敷地に立つホテルの建物の数は55棟にも上り、湖畔から高台にかけて疎らに点在している。それぞれの建物は独特な個性のある外観を呈し、中には長期滞在者のために炊事の設備のある棟もあるようだ。

センターの休憩所でしばらく待たされた我々は、リゾートの中を走る特別の小型バスに乗車して、高台を下った湖畔に建っていた第1号館の1階に案内された。(右は建物の配置図)

1階の部屋にはベランダがあって目捷のところに湖水が拡がり、眺望絶佳の別荘という感じで、湖の周りは嬋娟(センケン)として品のある、浮世絵のような世界が取り巻いていた。

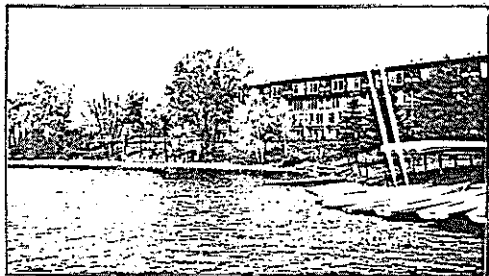
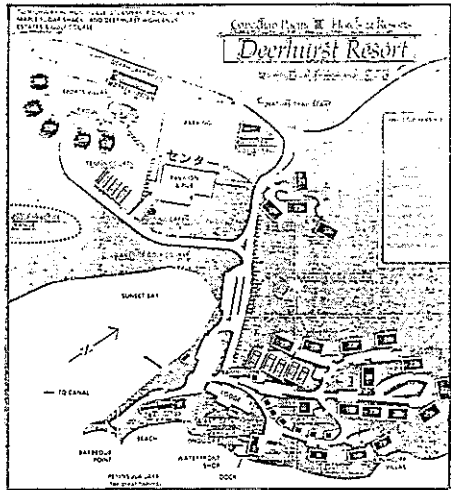
(右は宿泊した1号館とカヌーも浮かぶ湖)

体を温めてくれた陽も西の森に沈み、湖面を渡ってくる風の冷たさを肌に感じながら、落ち着いた心で憩うことのできる、こんな処に住んでみたい思うのであった。

夕食は130年の歴史をもつ建物のレストランで撮ることになった。「一安気、二食養」の諺の通り、健康に良いものの第一はのんびりと心を平静に保つこと、第二は食事だとばかり、一行は和気藹々の中で10時半まで快談を続けていた。

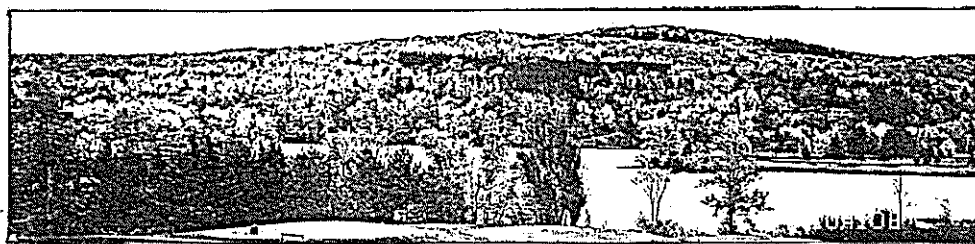
長くて静かな夜は風雅な宿が嬉しいものである。紅灯の巷を離れて原始以来の紅葉を観賞したことは一炊の夢のようで、余韻嫋々とした中で随喜することは長生きの妙薬だと感じていた。

生きることを楽しむことが人生である。私の存在の原動力である旅の奴になって掴んだ幸福に私の官能は激昂し、愉悦のうちに枕藉に入ったのである。



10月9日 (日) 雨のち晴

ディアハースト・リゾートの休日



「月に叢雲（ムラクモ）、花に嵐」と言われる世の中は邪魔が入りやすく、目を覚ましてベランダに立つと冷酷無情の小雨が降っており、天の采配は人力の及ばないことだと恨めしく空を眺めた。（上の写真は部屋の正面の朝景色、白色は紅葉）

快晴に恵まれた今回の紀行は意地悪くも、最終日を迎えて皮肉な雨に見舞われたが、雲が流れる合間から見える景色もまた乙なもので、濡れ葉の赤々と色付いた紅葉が湖面一杯に影を落としていた。

夜来の雨で散った落葉は仰いでみる美しさに負けず劣らず、まるで赤い絨毯を敷いたように辺りを染めており、その上を踏み締めながら歩く姿を想像するだけでも、胸がときめいてくる。

何時の間にか白い水鳥が餌をねだるようにベランダに近づいてきた。どの部屋の旅人も思いは同じのようで、餌を手にして戯れる光景は自然を生かした美しい庭園のようであった。

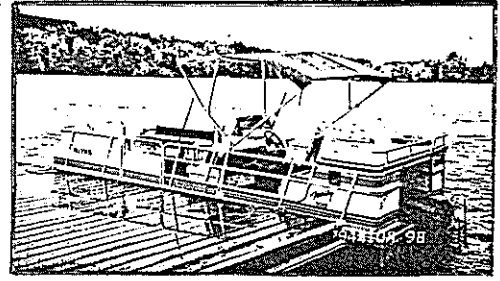
小雨の降り止んだ好機をとらえ、私も落葉を踏み締めて紅葉の木の下を逍遙した。このような心でのんびりと散歩するのは久しぶりのことで、切ないほど赤く染まった紅葉に手を差し伸べると、手につたう紅が体までうつるような感じであった。（上2枚の写真は水鳥と紅葉の湖畔の景観）

妖しいまでに美しく雄大な湖畔を更に歩いて行くと、周りの樹々は葉色を水中に映して立体的な紅葉の中に身を置いたようで、どこまでも絵葉書のような景色が続いていた。

水面に絵を描いたような眺めは、眺める者の心をとらえるのか、私も一枚の赤い楓の葉一枚を水に浮かべてみた。この光景はいくら麗句を並べても表現することは出来ず、一枚の葉を額に入れて飾って見たいと部屋に持ち帰ったのである。（上の写真は紅葉の湖畔の風景）

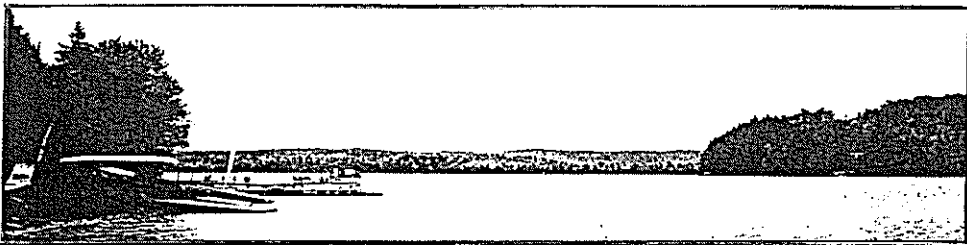


ディアハースト・リゾートには各所にプールやゴルフ場が設置され、湖上には本場らしくカナディアン・カヌーやヨットが係留されていた。冬は結氷してウィンター・スポーツが楽しめるという、四季を通じて楽園であった。（右の写真は遊覧船と桟橋）



雨も漸く上がり、湖上を走って周辺の素晴らしい紅葉を觀賞したいと遊覧船乗り場に行くと、皮肉にもまた激しい雨が降り出して残念にも船は出航中止となった。

帰国後、晴れ間をついて湖上を遊覧した一人から頂いたビデオを拝見すると、延々と広がる湖畔には各所に別荘が点在し、水上飛行機で遊覧する基地まで見えており、カナダの人たちの自然に親しむ余裕のある生活は、金持ち日本人の羨望の的となるかも知れないのであった。（下の写真は何処までも広がるサンセット・ベイの景観）



リゾートの休日を楽しく演出するホテルの部屋は、深まりゆくカナダの秋の旅情に浸る絶好の場所で、夢幻の境地で錦繡の屏風をめぐるした鏡のような湖を、時の経つのも忘れて眺めながら快談に耽っていた。

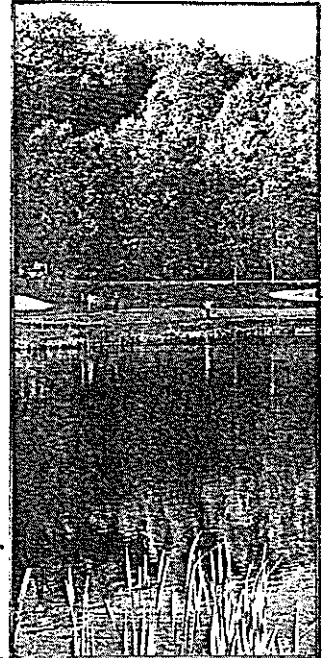
昼食時間が迫り後ろ髪を引かれる思いで、印象の深い部屋を明け渡さなければならなかった。嘘のように晴れ上がった空を見上げてレストランまで足を運び、バイキングが終わってからもバスに乗らず、美しいものを味わうには歩くことに超したことはない、青々とした芝生の上を踏みながらセンターまで歩いた。

眼前に広がる湖の向う側には楽しくゴルフに興じる姿も見え、どこまでも切れ目のない赤と黄の色調が池に映えて濃淡を区別して水を染め上げていた。

（右の写真はゴルフ場と紅葉に池）

湖と森に囲まれた紅葉のメッカのこのリゾートと、ローレンシャン高原とは両方とも色も姿も似ており優劣はつかず、これは「赤犬が狐を追う」という形容にぴったりだと思いながら、センターに辿り着いた。

センターには屋内テニスコートやプールなどが完備され、スポーツを楽しむ光景を眺めていると、晋の陶淵明の書いた武陵桃源郷の現代版ではないかと錯覚を起こすほどであり、いよいよ出発時間が迫って名残惜しくバスに乗車した。



ハンツビル～トロント

高原の中に湖沼あり、山道もある広々としたディアハースト・リゾーに美しい生命的な想いを遺し、バスは午後2時にセンターを出発してハンツビル駅に向かった。

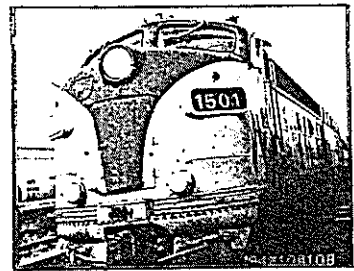
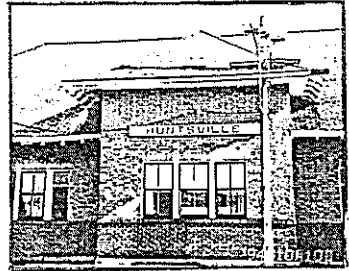
車の前に押し寄せてくる絵画のような景観は万里同風で、妖しいまでに鮮やかな多彩のトンネル街道を西に進み、45分後に湖に面したハンツビル駅に到着した。

小さな集落に過ぎないハンツビルの佳境に郷愁を覚えながら、駅舎の中に入った。木の香りの高い木造建築の駅はがらんとし、駅員は一人という閑散とした構えであり、我々以外は5人ぐらいの乗客にすぎない。

トロントに通じる「オンタリオノースランド鉄道」はVIA RAIL（大陸横断鉄道）と同じく、メープル・レッドの大地を走る「紅葉列車」として有名である。

我々が足跡を残してきたケベック州とオンタリオ州を振り返ってみると、2州の合計面積だけでも日本の7倍もあり、カエデの量を考えると気が遠くなる。しかし、この両州こそカナダの人たちが生き抜いてきた流れを、静かに物語っている地であると山野を見詰めていた。

午後3時43分に発車した列車は、何処も同じく森と湖が悠然と広がる長閑な秋景色の中を走り、ゆったりとした広い座席を一人占めにした気持ちは喜楽を呼び起こし、大陸鉄道の醍醐味を味いながら自然に白河夜船となってしまった。



（上の写真はハンツビルの駅舎、下はオンタリオノースアイランド鉄道の列車）

「朝風呂丹前長火鉢」といった気楽な物見遊山の旅は、生命の洗濯だと気持ちよく眠り、目を覚ますとトロントのCNタワーが窓際に映っていた。「流れに棹（サオ）」のように旅は予定の通りに進み、出発点に無事に戻ってきたのである。

回顧すると、胸の中が燃え立つような憧れをもってトロントを出発し、2000km以上に亘る地域のメープル・レッドを観賞することが出来た。そして今、古の都人のような風流心を身の奥まで満喫した喜びを噛み締めて、駅に降り立った。

ライトに照らされた駅前の時計塔の針は午後5時55分を指していた。我々は前回と同じく駅近郊のデルタ・チェルシー・イン・ホテルに入って小休止の後、夕食は近く中華料理店まで疲れた足を運ばなければならなかった。（右はトロント駅前の夕暮）

薄暗い歩道に並んだ街路樹の上に人の姿が見えると、上から何か悪臭を出す物が落ちてきて、下でそれを拾う女性の姿が見えていた。これは銀杏の実であったが、世知辛いこの光景は艶麗な紅葉街道と対照的で、興醒めする都会に辟易していた。



部屋に戻ってカナダ最後の夜景を眺めていると、山河襟帯の楓が思い出された。そして、犬馬のように無能のまま老いてゆき、或は欲を重ねて老いるのではなく、あの回春の秘薬のように燃える楓になりたいと願い、愛別離苦を感じて床入りした。

10月10日～11日 (月～火) 晴 トロント～成田

早朝の5時半のモーニングコールに叩き起こされると、何時もと同じく旅の最後は味気無く、名残惜しい思いが込み上げてくる。それは、自分が夢で蝶になったのか、蝶が夢をみて自分になったのか、夢と現実との境が判然としない胡蝶の夢が、消えていくからであった。

トロント空港を9時30分に飛翔したAC723便は10時にシカゴ空港に着陸し、まもなく乗り継いだJL009便は舞い上がり、2階席の窓際に座った私は、数々の快感な思い出を胸にして帰国の途に就いた。

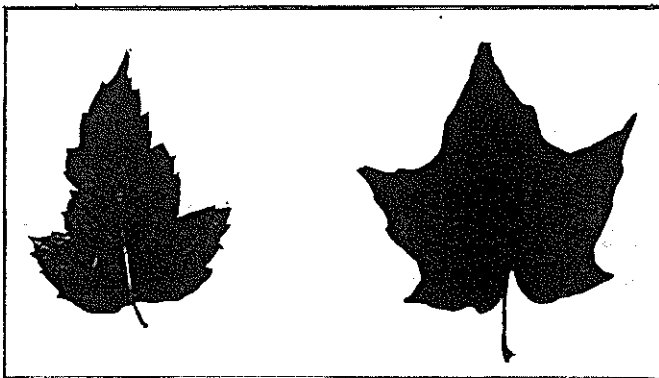
機上から瞰下する五大湖の周囲もまた紅葉の別世界が広がり、「盛りは一時」と言われるものの、カナダの多彩の色模様は何処までも限りなく我々を堪能させていた。本当に「命長ければ蓬菜を見る」の諺のように、今回のような幸福を感じたことは、心に深く留めて決して忘れられないだろう。

機は北上を続けてメープル・レッドの色調が視界から去ると、直ぐ銀世界の山並みが純白一色となって展開してきた。快晴の秋の陽を浴びた白雪皚々(ガイガイ)の眺望は、仙人となって空中を漫步する羽化登仙の気分である。

アラスカの上空を飛ぶ搭乗機は、太陽と駈けっこするようにして日附変更線を通り、成田まで陽が隠れることはないのであった。寝る間が極楽だと思っていると往路と同じく、杖をついていた私にスチュワーデスは2座席を用意し、またもや思い掛けない幸せに巡り合って横臥できた。感謝に堪えない。

長い間の願望であったカナダの紅葉探訪の旅も終わり、世事にこだわらずに悠然とした自然の境地にしたがいがいながら、袖すり合うも他生の縁となった旅人との別れの時が、刻一刻と迫ってきた。

成田到着は10月11日午後2時50分である。何よりも先ず肌に感じたことは日本の気候の暖かさであった。それと同時に、浮世は心次第で楽しくもなり悲しくもなる、人生航路はあざなえる縄の如しと旅を締め括ったのである。



「丈夫志四海 万里猶比隣」（丈夫は四海に志す、万里もなお比隣のごとし）。丈夫は世界を目指すから、万里といえども隣近所のようなものである、と1700年以上も昔の三国時代に、魏の曹植が詩に詠んでいる。

人間が成長して地球が狭くなった現代では、老若男女を問わず、思考や認識を媒介とする経験が肝要だと言うことで、将来を見抜いた活眼の詩と私は解釈したい。

今次のカナダ東部紀行は確かに世俗を離れた隠遁の匂いがしたが、旅を通じて積極的な人生への姿勢を学んだ。それは即ち、人生は作るものであって必然の姿などではなく、自分の人生を精いっぱいより良く工夫をこらすことであった。

そして「この世は無常迅速である」。無常な感じは若くても判るが、迅速という感じは老年にならないと判らない。年をとればとるほど時の経つのが速く感じられる。それを忘れさせる唯一の方法が私には旅であった。

誰にも迷惑を掛けず、また束縛されず、自由に時を楽しむことこそ老人の生活だ。足ることを知り安定した生活が維持できれば、あれこれと悩む必要はない。実践できるかどうかは別として、気持だけでもそうありたいと私は思っている。

遙かな夢を抱いて追いかけて訪れたカナダ東部は躍動していた。自然と見事な調和を見せていたケベック市、感動多彩なメープル街道、それぞれ魅力に溢れていた各都市を周遊し、思いのままに楽しめた印象は鮮やかに残り、何という贅沢な命の洗濯だったと歓喜している。

ただ一つ気掛かりになったのは、冷戦後の民族問題から発生した世界各地の闘争と同じく、時々新聞に報道されるモザイク社会カナダの英系、仏系の問題である。

かって仏系カナダ人は母国のフランスからも見離され、数において圧倒的に優勢な英語系民族に囲まれて、孤立感・無力感に悩まされてきた。

西部諸州は長くヨーロッパ中心主義であったカナダの政策から、地理的にも人工的にも切り離され、つんぼ状態に置かれてきた。

これらケベックや西部諸州がそれぞれ独自性を主張し始めたのは、自己の独自性や実力を自覚し、他の構成員と対等の発言を試みているに他ならず、それ自体は健全なことだと言えるだろう。

南隣のアメリカ合衆国が人種のルツボと称して世界各地から集まった移民を溶解し、単一のアメリカ人を仕立て上げることを目指した。一方、カナダは各構成員の独自性を尊重して、多様性の価値を認めるモザイク社会を提唱してきた。

事実この行き方は前記したように、世界第2の国土と細長い帯状で地理的条件が大幅に異なる居住地域、そして新しい歴史、豊富な天然資源、多様な少ない人口構成、アメリカに劣らぬ高水準の消費生活、これらの条件のカナダに即した方策のようにも考えられる。

歴史的には南隣のアメリカとほぼ同じ長さの伝統のカナダ社会だが、まだ「これがカナダ的」と言えるような形の国民性が、見られないのも現状ではないだろうか。

これは自然、地理的条件、人口の稀薄もさることながら、現代のカナダ社会の根底には、多様性の価値を認める現実的かつ基本的な考え方があるのだろう。

このように一方では多様性の価値を認めながら、他方では国家として、社会として、

統一性と独自性を如何にして作り出すかが、直面する最大の課題と言えるのではないだろうか。

そして交通や情報伝達手段の凄まじい発達によって、ますます多種多様な考え方、価値体系などが直接衝突する情況が、地球的規模で作り出されているのも現状である。

このことは我々日本人にとっても、決して他人事として済まされない極めて今日的な課題である。カナダの大動脈である東部地区を訪れた者にとっては、等しく懸念されることであろう。

世界最大級の大地の芸術が広がっていた東部カナダで、スケールが大きく美しい自然の懐で現実を学んだ事は、「換骨奪胎」（外形をそのままにして中身を取り替える）の思いがする。

秋空に色付いていたカナダのカエデは、「禍福は変転して定まりない」ことを教えているようでもあったが、願わくばこれからの人生も「喜楽」に生きたいものである。

